

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第436次発掘調査報告書 —

2022

姫路市教育委員会

序文

姫路市の中心部に位置する姫路城は、関ヶ原合戦の功により播磨 52 万石の大名になった池田輝政が慶長 6 年（1601）から同 14 年にかけて築城した平山城で、白鷺城とも呼ばれています。標高 45.5m の姫山に配置された本丸を中心に、周辺の武家屋敷や町屋などを含めて城下町全体が内堀・中堀・外堀の三重の堀で囲まれていました。このたび、発掘調査を行った北条口三丁目の周辺は、外堀と中堀の間に挟まれた外曲輪に位置し、町屋・社寺・下級の武家屋敷などが配置されていました。

姫路市の中心部は昭和 20 年（1945）の米軍による空襲により壊滅し、戦後復興のための土地区画整理等に伴い市街地も拡大してきました。近年、発掘調査の進展により城下町の遺構が地中に良好な状態で残存していることが明らかになりつつあります。今回の調査地は武家屋敷地に該当し、江戸時代の全時期を通じた遺構及び遺物が見つかりました。これらは地域の成り立ちや歴史的な変遷を解明する上で貴重な資料となります。ここにその成果を報告し、今後の調査・研究の進展に資するものです。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました事業関係者の皆様をはじめ関係の方々に心より御礼申し上げます。

令和 4 年（2022 年）3 月

姫路市教育委員会
教育長 西田 耕太郎

例言・凡例

1. 本書は、姫路市北条口三丁目 46 番・47 番・48 番において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、和田興産株式会社から委託を受け姫路市教育委員会が実施した。現地調査及び報告書の執筆・編集は姫路市埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。
3. 発掘調査に関する写真・図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4. 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系 V 系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準 (T.P.) を基準とした。
5. 土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
6. 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課発行『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』(2010) に依拠した。

目次

第 1 章 経過	1
第 2 章 調査の概要	1
第 3 章 遺構・遺物	
第 1 節 中・近世及び近代の遺構・遺物	1
第 2 節 古代以前の遺構・遺物	4
第 4 章 総括	4
報告書抄録	

表目次

表 1 出土遺物観察表	6
-------------	---

図目次

図 1 第 388 次調査との合成図	5	図 18 SK40・SK45・SK52 出土遺物	16
図 2 周辺の遺跡	7	図 19 SK61・SK70 平・断面図	16
図 3 調査位置図	7	図 20 SK61・SK70 出土遺物	17
図 4 調査区配置図	7	図 21 SK84・SK93・SK97 平・断面図	18
図 5 調査区全体図(中・近世及び近代)	8	図 22 SK84・SK93・SK97 出土遺物	18
図 6 調査区全体図(古代以前)	8	図 23 SD83・SK85・SD86・SK87・SK88・SK90・SK100 ・SD102・SK104 平面図	19
図 7 調査区北壁－西壁－南壁断面図	9	図 24 SD83・SK85・SD86・SK87・SK88・SK90・SK100 ・SD102 断面図	19
図 8 調査区東壁－北壁断面図	10	図 25 SK87・SK90・SD102 出土遺物	19
図 9 SG14・SD13・SD14-1 平・断面図	11	図 26 SK68・SK88・SK100 出土遺物	20
図 10 SK11・SK12・SK46・SK57・SK58 平・断面図	12	図 27 SE72・SE78 平・断面図	21
図 11 SK11・SK12・SK46・SK57・SK58 出土遺物	13	図 28 SK104 出土遺物	21
図 12 SK28・SD29 平面図	14	図 29 SE72・SE78 出土遺物	21
図 13 SK28・SD29 断面図	14	図 30 SD112・SD113・SD114・SD115・SD116 断面図	22
図 14 SK28・SD29-1 出土遺物	14	図 31 SD113 出土遺物	22
図 15 SK47 平・立面図	14	図 32 SX117・SX118 平・断面図	22
図 16 SK47 出土遺物	14		
図 17 SK36・SK37・SK38・SK39・SK40・SK44・SK45・ SK48・SK49・SK50・SK52 平・断面図	15		

写真図版目次

写真図版 1 遺構写真 (1)	写真図版 3 遺構写真 (3)	写真図版 5 遺構写真 (5)	写真図版 7 遺構写真 (7)
写真図版 2 遺構写真 (2)	写真図版 4 遺構写真 (4)	写真図版 6 遺構写真 (6)	

第1章 経過

姫路市北条口三丁目46番・47番・48番において住宅の建築工事が計画された(図2)。計画地が姫路城城下町跡(県遺跡番号020169)に該当することから、文化財保護法第93条の規定に基づき事業者から令和元年9月10日付で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。姫路市教育委員会では12月18日に遺跡の保存状況を把握するための確認調査(姫路城跡第430次調査 調査番号:20190486)を実施した結果、遺構及び遺物を検出した。これを受けて事業者と協議を行い、工事により遺構の破壊を免れることができない587㎡を対象に本発掘調査(姫路城跡第436次調査 調査番号:20190647)を実施することになった。令和2年4月1日付で事業者と協定を締結し発掘調査を開始した。現地調査は5月28日まで行った。現地調査終了後、整理作業及び報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査の開始から報告書の刊行までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会

教育長	西田耕太郎(令和3年4月1日～)	文化財課
	松田克彦(～令和3年3月31日)	課長
教育次長	峯野仁志(令和3年4月1日～)	福永安洋(兼務 令和3年7月1日～)
	岡本裕(～令和3年3月31日)	村田泉(令和3年4月1日～6月30日)
生涯学習部		大谷輝彦(令和2年4月1日～令和3年3月31日)
部長	福永安洋	課長補佐
		大谷輝彦(～令和2年3月31日)
		技術主任
		中川猛(令和3年4月1日～)
		同
		関梓

埋蔵文化財センター

館長	大谷輝彦(令和3年4月1日～)
	松本智(～令和3年3月31日)
課長補佐	岡崎政俊
	森恒裕
	多田暢久(令和3年4月1日～)
技術主任	南憲和

第2章 調査の概要

城下町絵図等の史料によると調査地は姫路城の外曲輪南東部にあたり、北条門からは約300m北に位置する(図3・4)。池田氏時代から第一次松平氏時代の17世紀前半までの様相は不明であるが、第一次榊原氏時代(1649～67)以降の絵図によれば、第二次松平氏時代(1667～82)が空白地となっているものの、北を正面とする武家屋敷が位置していたことが知られる(註1)。寛永4年(1751)から宝暦4年(1754)に比定される「姫路侍屋敷図」(註2)によると「島山孫右衛門」、安永7年(1778)から文化7年(1810)の「姫路城下絵図」(註3)では「高橋源蔵」の屋敷地となっているが、どちらも酒井家資料にみることはできない。しかし、岡山大学附属図書館池田文庫の所蔵する「姫路城下町図」では「新井斧八」が記載され、この人物は「文政家臣録」によると17俵3人扶持の下級藩士であったことが判る。

調査は現代の盛土・攪乱等を機械で除去した後、遺構を人力で発掘し、記録保存のため写真撮影及び必要な図化を行った。遺構は現地表から約20cm下(標高約12.3m)で現れた黄橙色シルト質粘土(地山)上面で検出した。中・近世及び近代の遺構としては、園池(SG14)及びそれに伴う溝(SD13・14-1)、溝(SD29・83・86・102)・土坑(SK11・12・28・36～40・44～50・52・57・58・61・68・70・84・85・87・88・90・93・97・100・104)・井戸(SE72・78)、石組(SX119)がある。このほか、古代以前の溝(SD112～116)・性格不明の遺構(SX117・118)を検出した(図5・6・写真図版1)。柱穴・ピットは多数検出したが、その一部は古代以前の溝を切っており、埋土等から中世以降のものだと判断した。

第3章 遺構・遺物

第1節 中・近世及び近代の遺構・遺物

出土遺物から遺構の大半は近世のもので、一部が近代に属すとみられる。このうち、遺物が一定量出土したものなど主要な遺構について、報告する上で調査区を便宜的に西部・中央部・東部に分け、この順に記述する。

(1) 西部

SG14・SD13・SD14-1(図9・写真図版2) SG14は東西3.3m以上、南北8.7mで、検出範囲でみる限り楕円形の可能

性がある。検出部の中央からやや南側が最も深く、検出面からは1.1m（以下、深さは検出面からの深さとする）を測る。南東部には肩部から0.3m下に最大幅0.6mの三日月形のテラス面を設けており、内側はさらに0.3m段落ちし最深部へ至る。段落ちの肩部には自然石を縁石状に配置していた。北東部には北東から通じる2条の溝（SD13・SD14-1）が取り付いており、SD13の基底部には土管の一部が残存していた。SG14の埋没後に南北方向の石組溝が構築されており、埋没に伴い投棄されたとみられるガラス片を含む近代の陶磁器類がまとまって出土した。

SK11（図10・11・写真図版3）東西2.7m以上、南北1.3m、深さ0.4mを測る。断面形は箱堀状を呈し、溝の可能性もある。検出長からあえて主軸方位を推測すると、N-約73.5°-Wとなる。遺物は瀬戸美濃焼志野向付（図11-1。以下、遺物番号は通し番号のみを記載する。）、肥前系施釉陶器碗（2）、中国製白磁碗（3）、焼塩壺（4）が出土した。これらは16世紀末から17世紀前半頃のものであるが、小片のため遺構の時期を示すとは断定できない。

SK12（図10・11・写真図版3）東西2.2m以上、南北2.6mの不定形な形状を呈し、深さ0.3mで炭層の広がりを検出した。炭層の上位から肥前系施釉陶器溝縁皿（5）、陶器播鉢（6）、備前焼盤（7）・播鉢（8）、炮烙（9）、石製硯（10）が出土した。8は放射状の播り目を有す。9は外面下半に右上がりの平行タタキを施す。これらは17世紀前半頃のものである。

SK46（図10・11・写真図版3）東西1.0m、南北約1.2mの長方形で、深さは0.3mを測る。埋土の下層から土師器皿が6枚（11～16）出土した。全てロクロ成形で、口径は8.9～10.6cmを測る。

SK57（図10・11・写真図版3）SK58に後出する。東西0.6m、南北0.4mの小土坑である。土師器皿が4枚（17～20）出土した。全てロクロ成形で、口径は6.7～7.8cmを測る。

SK58（図10・11・写真図版3）SK57に先行する。東西2.7m、南北1.4mの長方形で、深さ1.5mを測る。左巴文の軒丸瓦（21）、棧瓦（22）が出土しており、遺構の時期は18世紀前半以降と考えられる。

SK28（図12・13・14・写真図版3）東西1.9m、南北5.4mで細長い形状を呈しSD29に並行する。深さは0.5mを測る。外面に格子タタキを持つ土師器塙（23）のほか、須恵器細片が出土した。23は16世紀後半頃のものである。ただし、出土遺物は少量であり、遺構の時期を断定することは困難である。

SD29（図12・13・14・写真図版3）南北方向に延びる浅い溝である。中央の攪乱を境に北側をSD29-1、南側をSD29-2とした。幅は前者で1.0～2.1m、後方で0.6mを測る。主軸方位を推測するならば後者はN-約23°-Eで、飾磨郡の条里地割とほぼ一致する。SD29-1から青花皿（24）・青磁碗（25）が出土した。ただし、出土遺物は少量であり、遺構の時期を断定することは困難である。

SK47（図15・16・写真図版4）掘方が東西2.3m、南北0.9m以上、深さ1.0mを測る水琴窟である。検出段階では穿孔された甕の底部が周囲の漆喰（厚さ約4cm）と一体化した状態で現れた。その構造は平坦な基底部から35cmの高さまで角礫を充填し、大谷焼の甕（26）を水平かつ逆位に設置した後、さらに甕の器高の半分位まで礫を詰めて固定していた。底部の穿孔から落ちる水を反響させるための受け皿等は検出されなかった。26の底部外面には墨で「| 〇」と書かれていた。18世紀末以降の遺構と考えられる。検出した位置からみて屋敷地の裏側に埋設されていたと想定される。

（2）中央部

SK36・SK37・SK38・SK39・SK40・SK44・SK45・SK48・SK49・SK50・SK52（図17・18・写真図版5）これらは径0.6～1.1mでほぼ円形を呈し、深さは0.2～1.0mを測る。SK45は底面から壁面にかけて漆喰が貼られ、基底部の中央に関西系焼締陶器播鉢（33）が据え付けられていた。SK40からは施釉陶器有脚灯明皿（27）・灯明皿（28）・乗燭（29）、備前焼灯明皿（30）の各種灯明具のほか、染付筒形碗（31）が出土した。これらは18世紀から19世紀中葉頃のものと思われる。SK45からは白磁小碗（32）が出土した。33は見込みに「*」形の播り目を有し、縁帯外面に2条の凹線を巡らすタイプで18世紀後半頃とみられる。SK52からは施釉陶器碗（34）、中心飾り（不明）から唐草が2反転する軒平瓦（35）が出土した。

SK68（図5・26・写真図版5）SX118、SK68-1（SK68に先行する土坑をSK68-1とした）を切る。東西2.0m、南北4.7m、深さ0.8mを測る。SK68から染付広東碗・碗・蓋、施釉陶器仏花瓶、砥石が出土した。これらは18世紀後葉から19

世紀前葉頃のものである。

(3) 東部

SK61 (図19・20・写真図版3) SK70を切る。東西1.2m、南北4.2mの長方形を呈し、深さは0.2mを測る。主軸はN-16° -Eである。土師器皿(36)、丹波焼鉢(37)、京・信楽系施釉陶器碗(38)、施釉陶器碗(39)、白磁皿(40)、染付碗(41・42)・炮烙(43)、瓦質土器風炉(44)が出土した。36はロクロ成形で、40は蛇ノ目釉剥ぎ内に重ね焼きの痕跡が認められる。これらの時期は17世紀後半から18世紀前半頃とみられる。

SK70 (図19・20・写真図版3) SK61に切られる。径1.4mの円形で、深さは1.5mを測る。断面形は箱状を呈す。遺物は中層(2～4層)と下層(5～7層)に分けて取り上げた。中層から土師器皿(45～47)・杯(48)・焼塩壺の蓋(49)、肥前系施釉陶器皿(50・51)・播鉢(52)が出土した。45～47はてづくねで、48はロクロ成形である。50・51は見込みに胎土目が残る。下層からてづくねの土師器皿(53)、肥前系施釉陶器皿(54)・天目碗(55)が出土した。53は口縁端部を摘み上げる形態で、16世紀後半まで遡る。54は胎土目が残る。また、先行して半裁した際に土師器皿(56～59)、青花碗(60)・皿(61)・肥前系施釉陶器皿(62)・鉢(63)・向付(64)、炮烙(65)、平瓦(66)が出土した。56～58はてづくねで、59はロクロ成形である。

土師器皿は図化した8点のうち7点がてづくねで、その口径は10.6～11.8cmに収まる。技法的に内面の凹線状圏線やナデ抜きが省略された段階に位置づけられる。これらの遺物は資料数の制約から中・下層で時期差を検討することは困難であるが、概ね17世紀初頭を大きく下らない時期に比定できる。

SK84 (図21・22・写真図版5) SK97を切る。東西約1.0m、南北2.0mの楕円形を呈し、深さ0.5mを測る。底部に「播陽東山」の銘をもつ東山焼の染付皿(67)が出土した。

SK93 (図21・22・写真図版5) SK97に切られる。東西2.5m、南北2.4mの隅丸方形を呈し、深さは0.4mを測る。土師器皿(68・69)、備前焼播鉢(70)、肥前系施釉陶器溝縁皿(71)・大皿(72)、炮烙(73)、土師器埴(74)、丸瓦(75)のほか獣骨が出土した。68はてづくね、69はロクロ成形である。71・72は見込みに砂目積みの痕を残す。86はコビキBである。これらは17世紀前半頃に比定される。

SK97 (図21・22・写真図版5) SK84に切られる。東西1.2m、南北1.8mの楕円形を呈し、深さ1.1mを測る。龍を陽刻した芥子面(76)が出土した。

SD83 (図23・24・写真図版5) SK88を切る。幅0.6m、延長4.0m以上で、深さ0.4mを測る。南端は攪乱を受けている。図化に耐えなかったが線描きの染付の細片が出土しており、19世紀以降に埋没したとみられる。

SK85 (図23・24・写真図版6) SK100、SK87、SK88を切る。幅0.6m、南北4.0mの細長い形状で、深さ0.2mを測る。図化に耐えなかったがベロ藍の染付の細片が出土しており、幕末以降と考えられる。

SD86 (図23・24・写真図版6) 幅0.4m、南北2.7m以上、深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

SK87 (図23・24・25・写真図版6) 東西1.2m、南北2.0m以上、深さ0.5mを測る。染付端反碗(77)が出土した。幕末頃のものである。

SK88・SK100 (図23・24・26・写真図版5) SD102を切り、SD83、SK85、SK87に切られる。SK88とSK100は攪乱に分断され、先後関係を明確に認識できなかったが、同一遺構の可能性もある。両者を含めると東西2.2m、南北5.6mの不定形な形状を呈し、深さは浅い部分で0.3m、深い部分で0.9mを測る。SK88から染付碗(80)・鉢(81)、土人形(82)、軒平瓦(83)、猿形の瓦製品(84)が出土した。SK100からは施釉陶器行平鍋の蓋(85)、青磁仏花瓶(86)、関西系焼締陶器播鉢(87)、土人形(88・89)が出土した。80は菊花文のコンニャク印判が用いられ、81は蛇ノ目凹形高台を有す。82・88・89は頭部を欠く。83の瓦当文様は中心飾り(不明)から上向きに発し2反転する唐草が連結するが、連結部から小茎が右下に分枝する。遺構の時期としては80・81のように18世紀代のものが含まれるものの、1層から85が出土しており、下限は幕末以降と考えられる。

SK90 (図23・24・25・写真図版5) SE78に切られる。東西4.4m、南北1.2mの長方形を呈し、深さ0.7mを測る。主軸はN-約66° -Wである。染付の広東碗(78)が出土した。18世紀後葉から19世紀前葉頃のものである。

SD102 (図23・24・25・写真図版6) SK104を切り、SK100に切られる。幅0.7mで南北に延び、途中で南東方向に

屈曲する。土師器有脚灯明皿（79）が出土した。柿釉が施され、19世紀代のものである。

SK104（図23・28） SD102に切られる。東西3.0m以上、南北2.2mの不定形な形状であり、整地層のたわみの可能性もある。染付碗（90）、関西系焼締陶器播鉢（91）が出土した。90は「くらわんか手」と呼ばれる器高が低く、見込みが広い厚手の碗で、18世紀中葉頃に盛行するものである。

SE72（図29・写真図版6） SE78に切られる。石組の井戸で井側内の径0.9m、掘方の径2.0m、深さは2.4mを測る。石組の基底部分には角材を一辺0.7mの方形に組んでいた。水溜施設は検出されなかった。遺物は少量で、井側の上層から氷裂文を描いた染付碗（92）が出土した。

SE78（図29・写真図版6） SE72、SK90を切る。石組の井戸で井側内の径0.8m、掘方の径2.0m、深さは2.7mを測る。石組は深さ1.5mまで取り除かれていた。遺物は少量で、井側の上層から氷裂文を描いた染付碗（93）、施釉陶器碗（94）が出土した。94は幕末頃のものであろう。

SX119（図5・8） 北壁において表土直下で石組を検出した。基底部分に長辺0.8m、高さ0.2mの比較的大型の石材を配し、その上部に小円礫が積まれていた。小円礫は大型石材の側面にも充填されていた。総高0.5mを測るが、検出範囲が狭小であり、詳しい構造は不明である。調査区に近接して東西方向の街路が想定される（図1）ため、その側溝の石組の背面を検出した可能性がある。

第2節 古代以前の遺構・遺物

SD112・SD113・SD114・SD115・SD116・SD119（図6・30・31・写真図版7） 調査区の中央部から西部にかけて6条の溝を検出した。SD113～116は幅0.5～2.0mを測り、主軸方向N-42° -Eで並行し調査区外へ続く。深さは0.2～0.4mで、いずれも土層断面において砂質土（水成層）が観察され、断面GラインではSD115がSD114を切ることを確認した。SD113は調査区の中央から北側では東肩で段差がつき、中央から南壁にかけて2条に分かれるが、断面観察では切り合いを確認できなかった。SD112は幅0.5m、深さ0.1mを測り、SD113～116とは異なり弧を描くように東へ湾曲し、中央部で消滅していた。遺物はSD113の上層から土師器甕（95）が出土したほか、SD116の下層からは図化に耐えない土師器細片がわずかに出土した。95は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部に凹線が1条巡る。8世紀代のものである。

SX117（図32・写真図版7） SE72の南東で検出した東西4.0m、南北3.0mの不定形な土坑状の落ち込みで、深さ0.4mを測る。埋土は地山と酷似するが、焼土塊及び赤化した焼土を含んでいた。遺物は出土しなかったが、埋土等から判断すると古代以前の可能性がある。遺構の性格は不明である。

SX118（図32・写真図版7） SK68-1の北に位置する。当初柱穴と炭化材が確認され、続いてこれらに切られる焼土塊及び焼土面を検出した。大半をSK68-1及び後出する柱穴に切られており、検出範囲は径1.0m前後の半円形を呈す。遺物は出土しなかったが、埋土等から判断すると古代以前の可能性がある。遺構の性格は不明である。

第4章 総括

調査地は姫路城の外曲輪南東部の下級武家屋敷地の一区画に該当する。絵図から想定される屋敷地の面積は約950㎡であり、そのうち60%強を調査した。今回の調査と西側の第388次調査（註4）の間には南北街路が想定された（図4）が、周辺地割を勘案すると、街路は想定より約4.5m西にずれ、現在の道路とほぼ重複していると想定される（図1）。また、SX119が東西街路の側溝の石組の一部であった場合、その街路も現在の道路と重複していると推測される。

江戸時代の遺構としては、17世紀初頭頃のSK70が最も古くなるが、確実に同時期といえる遺構は他に存在せず、17世紀前半以前の土地利用は不明である。絵図では17世紀中頃には武家屋敷地になっており、18世紀後半から19世紀初頭頃までは継続していたとみられ、その表記から屋敷地の正面は北向きであったと推定される。今回の調査では礎石等の建物遺構は見つからなかったが、土坑・溝等の遺構が検出され、17世紀前半から幕末・近代にわ

たる遺物が出土した。また、18世紀末から幕末・近代には園池（SG14）や水琴窟（SK47）が設けられており、絵図を援用すれば、前者は屋敷地の正面側、後者は裏側に位置していたと想定される。絵図の情報が約4.5mで全体に西にずれると仮定すると、SD83付近が東側の屋敷地との境界となり、この付近にSD83等の南北に直線的に延びる溝やSK85等の溝状の土坑が集中していることは看過できない。このことは、これらの遺構が区画施設の一部であった可能性を想起させるとともに、約4.5m西にずれる事象の蓋然性を高めるものと考えられる。18世紀後半以降の遺構（SK40・SK45・SK68・SD83・SK85・SK87・SK88・SK100・SK90・SD102・SE78）の分布をみると、建物の主屋はSK68とSK47を結んだライン付近より西側で、SG14以南に想定される。井戸（SE72・SE78）は主屋から東に約6～7m離れて位置していたことになる。また、北側の街路への出入口の位置はSG14・SD13以东に求められる。

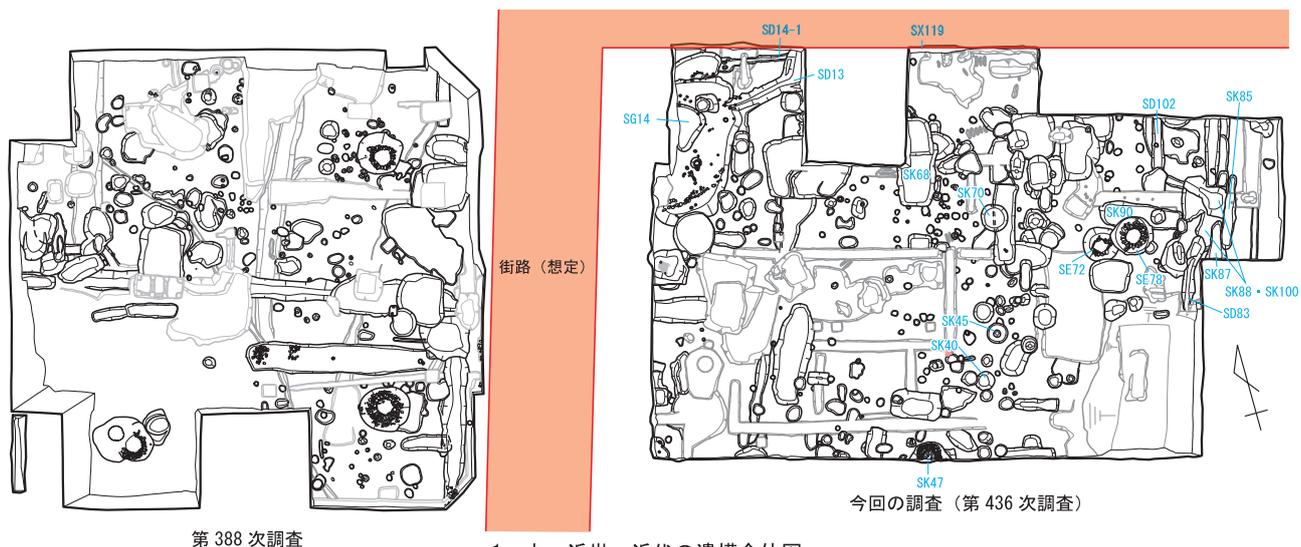
このように18世紀後半以降の武家屋敷地の空間構成を検討した結果、主屋の位置は南西部に想定され、主屋の北西に園池、裏側に水琴窟を設けた庭園を配置し、井戸は主屋から一定の距離を隔てた東側に存在したと考えられる。

古代以前の溝（SD113～116）は第388次調査のSD12・14と主軸方向がほぼ一致し、関連遺構の可能性はある。これらと飾磨郡の条里地割（N-23°-E）の関係については、今後の課題としたい。

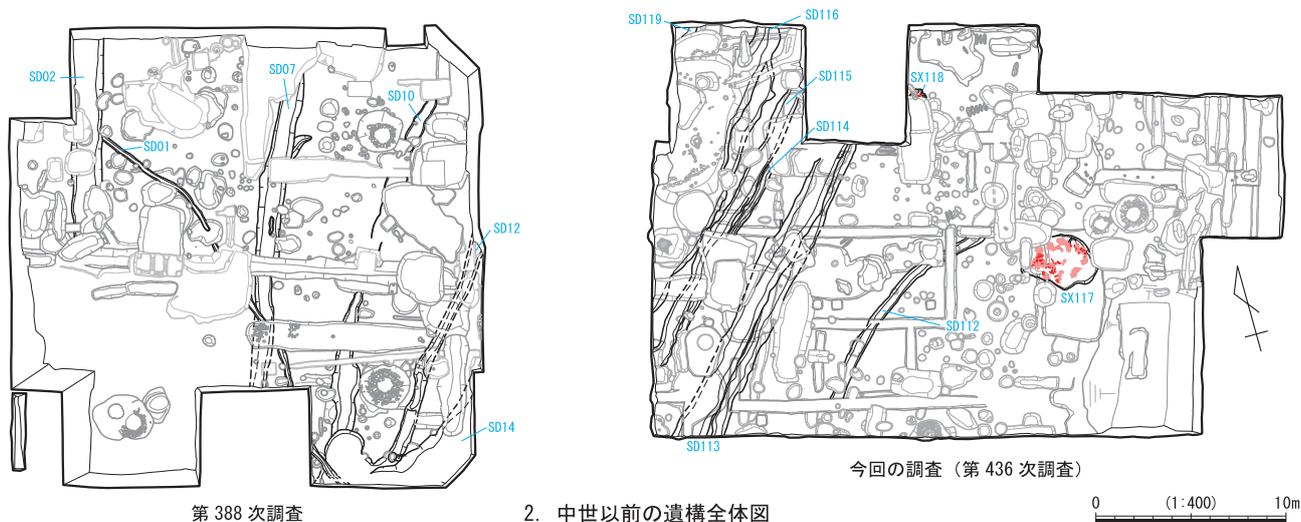
（註1）『姫路市史 第十巻 史料編 近世1』、『姫路市史 第十一巻上 史料編 近世2』、『姫路市史 第十一巻下 資料編 近世3』による。

（註2）・（註3）姫路市立城郭研究室 2014『姫路城絵図集』

（註4）姫路市教育委員会 2020『姫路城城下町跡—姫路城跡第388次発掘調査報告書—』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第92集



1. 中・近代、近代の遺構全体図



2. 中世以前の遺構全体図

図1 第388次調査との合成図

()内は復元値。単位はcm。

番号	遺構・層位	種別	器種	口径(長さ)	器高(高さ)	最大径	底径(幅)	色調	残存	備考
1	SK11	施釉陶器	向付		残3.8			2.5Y8/1灰白(釉)	口縁1/20	瀬戸・美濃焼志野
2	SK11	施釉陶器	碗		残4.6			5Y6/2灰オリーブ(釉)	口縁1/15	肥前系。絵唐津
3	SK11	白磁	碗		残4.8			N8/0灰(釉)	口縁1/10	中国製
4	SK11	土師器	焼塩壺	5.1	残6.0			7.5YR7/6橙	口縁1/3	
5	SK12	施釉陶器	皿		残2.4			5Y7/2灰白(釉)	口縁1/10	肥前系。溝縁皿
6	SK12	施釉陶器	播鉢		残3.1			10YR4/2灰黄褐	口縁1/10	
7	SK12	施釉陶器	盤	(26.7)	残4.6		(15.8)	5YR5/3にぶい赤褐	口縁1/4	備前焼
8	SK12	施釉陶器	播鉢	(28.7)	14.4	(29.4)	(13.2)	10R4/2灰赤	口縁1/4	備前焼
9	SK12	土師器	炮烙	(26.5)	7.5	(28.2)		7.5YR5/4にぶい褐	口縁1/5	外面に右上がりの平行タタキ
10	SK12	石製品	硯	残6.3	残1.4		残8.2	5Y6/2灰オリーブ	不明	
11	SK46	土師器	皿	8.9	1.9		5.1	5Y8/1灰白	口縁1/2	ロクロ成形
12	SK46	土師器	皿	9.1	2.0		5.1	7.5YR8/2灰白	口縁2/3	ロクロ成形
13	SK46	土師器	皿	(9.4)	1.8		(5.4)	2.5Y8/1灰白	口縁1/3	ロクロ成形
14	SK46	土師器	皿	(9.6)	2.2		(5.7)	2.5Y8/1灰白	底部2/3	ロクロ成形
15	SK46	土師器	皿	9.5	1.8		5.5	2.5Y8/1灰白	口縁3/4	ロクロ成形。灯明皿として使用
16	SK46	土師器	皿	10.6	2.1		6.1	2.5Y8/2灰白	ほぼ完形	ロクロ成形。灯明皿として使用
17	SK57	土師器	皿	6.7	1.6		5.3	10YR8/2灰白	口縁7/8	ロクロ成形
18	SK57	土師器	皿	7.1	1.5		5.1	2.5Y8/2灰白	口縁2/3	ロクロ成形
19	SK57	土師器	皿	(7.6)	1.7		(5.1)	10YR8/3浅黄橙	底部2/5	ロクロ成形
20	SK57	土師器	皿	(7.8)	1.6		(5.3)	10YR7/3にぶい黄橙	口縁1/3	ロクロ成形
21	SK58 上層	瓦	軒丸瓦	残7.7	14.7			5Y8/1灰白	不明	
22	SK58	瓦	棧瓦					N4/0灰	不明	
23	SK28	土師器	埴		残4.0			10YR8/4浅黄橙	口縁1/20	外面に格子タタキ
24	SD29-1	青花	皿		残1.7			7.5GY8/1明緑灰(釉)	底部1/20	
25	SD29-1	青磁	碗		残2.0		(6.0)	10Y5/1灰	底部1/4	中国製
26	SK47	施釉陶器	甕	58.5	66.6	69.2	25.1	7.5YR3/3暗褐	ほぼ完形	大谷焼
27	SK40	施釉陶器	灯明具	(5.6)	残3.4			10YR8/6黄橙(釉)	口縁1/3	受口径(6.7)。有脚
28	SK40	施釉陶器	灯明具	(8.6)	残1.7			5Y8/3淡黄(釉)	口縁1/4	受口径(6.7)。有脚
29	SK40	施釉陶器	灯明具	4.9	5.0	6.3	3.9	7.5YR4/4褐(釉)	完形	兼燭
30	SK40	施釉陶器	灯明具	(11.8)	残1.5		(5.2)	2.5YR4/2灰赤	口縁1/5	受口径(9.0)。備前焼灯明皿
31	SK40	染付	碗	(8.4)	残5.5			10GY8/1明緑灰(釉)	口縁1/3	筒形碗
32	SK45	白磁	小碗		残2.2		3.0	2.5GY8/1灰白	底部3/4	
33	SK45	施釉陶器	播鉢	33.3	13.2	33.7	16.3	5YR4/2灰褐	ほぼ完形	備前焼
34	SK52	施釉陶器	碗	(12.6)	4.2		(4.2)	2.5GY8/1灰白(釉)	口縁3/7	
35	SK52	瓦	軒平瓦	残10.2	3.5			2.5Y8/2灰白	不明	平瓦接合部の裏面にヨコナデ
36	SK61	土師器	皿	(10.0)	残1.9		(7.1)	10YR7/4にぶい黄橙	口縁1/3	ロクロ成形
37	SK61	施釉陶器	鉢		残6.4		(11.2)	2.5YR4/2灰赤	底部1/5	丹波焼
38	SK61	施釉陶器	碗	(9.8)	残5.2			5Y7/3浅黄(釉)	口縁1/5	京・信楽系
39	SK61	施釉陶器	碗		残3.5		(5.8)	7.5YR6/6橙(釉)	底部1/4	
40	SK61	白磁	皿	(13.3)	3.8		(5.0)	10GY8/1明緑灰(釉)	口縁1/5	蛇ノ目刺ぎ
41	SK61	染付	碗		残4.0		(4.6)	10Y8/1灰白(釉)	底部1/5	
42	SK61	染付	碗	(9.2)	5.1		4.5	N8/0灰白(釉)	口縁2/3	
43	SK61	土師器	炮烙	(27.2)	残4.7	(28.4)		7.5YR5/4にぶい褐	口縁1/4	
44	SK61	瓦質土器	風炉		残14.9			5Y2/1黒	底部1/10	
45	SK70 中層	土師器	皿	10.6	2.4		5.5	2.5Y8/2灰白	口縁19/20	てづくね。灯明皿として使用
46	SK70 中層	土師器	皿	10.9	2.4		3.9	10YR7/3にぶい黄橙	口縁7/8	てづくね。灯明皿として使用
47	SK70 中層	土師器	皿	10.9	2.5		4.4	2.5Y8/3淡黄	完形	てづくね。灯明皿として使用
48	SK70 中層	土師器	杯	(10.8)	残3.3	(7.6)	7.5YR7/6橙	口縁1/3	ロクロ成形	
49	SK70 中層	土師器	蓋(焼塩壺)	(6.5)	1.8			7.5YR6/6橙	口縁1/2	
50	SK70 中層	施釉陶器	皿	12.7	3.3		5.6	2.5Y7/2灰黄(釉)	口縁3/4	肥前系。胎土目
51	SK70 中層	施釉陶器	皿	(16.9)	残5.6		5.3	2.5Y7/1灰白(釉)	底部完形	肥前系。絵唐津
52	SK70 中層	施釉陶器	播鉢	(23.9)	残5.6	(9.2)		2.5YR4/2灰赤	底部1/3	肥前系。口縁部は同一個体カ
53	SK70 下層	土師器	皿	(11.7)	残2.7	(6.5)		5Y7/4にぶい橙	口縁1/6	てづくね。灯明皿として使用。口縁端部を積み上げる。
54	SK70 下層	施釉陶器	皿	(10.6)	2.6	(3.9)		7.5Y7/1灰白(釉)	口縁1/6	肥前系
55	SK70 下層	施釉陶器	碗		残5.8		4.3	7.5YR5/4にぶい褐(釉)	底部完形	肥前系。天目形
56	SK70	土師器	皿	10.8	2.4		6.1	2.5Y8/2灰白	完形	てづくね。灯明皿として使用
57	SK70	土師器	皿	11.1	2.3		5.0	2.5Y8/2灰白	ほぼ完形	てづくね。灯明皿として使用
58	SK70	土師器	皿	11.8	2.8		3.5	10YR8/2灰白	口縁1/2	てづくね。灯明皿として使用
59	SK70	土師器	皿	(10.8)	2.0	(7.6)		10YR6/4にぶい黄橙	口縁1/5	ロクロ成形
60	SK70	青花	碗	(11.9)	残4.0			2.5GY8/1灰白(釉)	口縁1/5	
61	SK70	青花	皿	(13.4)	残3.1	(7.8)		明青灰(釉)	口縁1/7	高台に砂付着
62	SK70	施釉陶器	皿	(12.4)	残2.9		4.9	5Y6/2灰オリーブ(釉)	口縁1/2	
63	SK70	施釉陶器	鉢	18.7	11.1	19.1	7.6	7.5Y5/2灰オリーブ(釉)	口縁1/3	肥前系。絵唐津
64	SK70	施釉陶器	向付	(6.7)	残11.8	(7.3)	4.4	5Y6/1灰(釉)	口縁1/3	肥前系。絵唐津
65	SK70	土師器	炮烙		残6.8			10YR5/2灰黄褐	口縁1/10	外面に右上がりの平行タタキ
66	SK70	瓦	平瓦	残10.0				10YR7/4にぶい黄橙	不明	
67	SK84	染付	皿	(10.4)	2.2	(6.8)		7.5GY8/1明緑灰(釉)	口縁1/4	東山焼。「播陽東山」銘
68	SK93	土師器	皿	(8.4)	残2.0	(4.6)		7.5YR6/4にぶい橙	底部1/3	てづくね
69	SK93	土師器	皿		残1.8			7.5YR7/4にぶい橙	口縁1/10	ロクロ成形
70	SK93	施釉陶器	播鉢		残7.1			5YR6/6橙	口縁1/10	備前焼
71	SK93	施釉陶器	皿	(12.7)	残3.8		5.1	7.5Y6/2灰オリーブ(釉)	口縁1/3	肥前系。溝縁皿。砂目
72	SK93	施釉陶器	大皿	(29.0)	残7.7		9.9	7.5Y5/3灰オリーブ(釉)	口縁1/5	肥前系。砂目
73	SK93	土師器	炮烙	(23.7)	残6.2	(24.8)		2.5Y6/3にぶい黄	口縁1/2	外面に右上がりの平行タタキ
74	SK93	土師器	埴		残3.9			5YR6/6橙	口縁1/10	
75	SK93	瓦	丸瓦	残15.6				N4/0灰	不明	
76	SK97	土製品	芥子面	3.1	1.1		3.3	7.5YR7/6橙	完形	
77	SK87	染付	碗	8.9	5.2		3.8	5GY8/1灰白(釉)	ほぼ完形	端反碗
78	SK90	染付	碗	(10.4)	残5.7	(5.9)		5GY8/1灰白(釉)	底部1/4	広東碗
79	SD102	土師器	灯明具	6.0	残2.2			2.5Y8/2灰白	口縁完形	柿釉が施される。有脚
80	SK88	染付	碗	(10.0)	残5.4		42.0	明緑灰(釉)	底部完形	くらわんか碗
81	SK88	染付	鉢	(9.8)	残6.4	(10.3)	6.1	明緑灰(釉)	口縁1/3	蛇ノ目凹型高台
82	SK88	土製品	人形		残4.4		3.8	2.5Y7/3浅黄	不明	
83	SK88	瓦	軒平瓦	残9.7	3.9			N4/0灰	不明	
84	SK88	瓦製品	人形		21.4			N5/0灰	ほぼ完形	猿形
85	SK100 1層	施釉陶器	蓋(行平鍋)	(13.5)	2.3		3.7	5YR6/4にぶい橙	口縁1/3	白化粧土でイッチン掛け
86	SK100	青磁	仏花瓶	8.7	15.8	9.2	5.8	7.5Y7/2灰白(釉)	口縁2/3	
87	SK100	施釉陶器	播鉢	35.4	14.6		16.4	2.5YR5/6明赤褐	完形	関西系
88	SK100	土製品	土人形		残4.8		残3.9	10YR7/4にぶい黄橙	不明	
89	SK100	土製品	土人形		残7.8		残3.7	7.5YR7/6橙	不明	
90	SK104	染付	碗	(10.0)	残5.4			明緑灰(釉)	底部1/2	くらわんか碗
91	SK104	施釉陶器	播鉢	(32.5)	残9.5			5YR6/6橙	口縁1/6	関西系
92	SE72 上層	染付	碗		残4.0			7.5GY8/1明緑灰(釉)	底部1/8	
93	SE78 上層	染付	碗		残2.9			2.5GY8/1灰白(釉)	口縁1/6	
94	SE78 上層	施釉陶器	碗	12.5	5.0		4.6	10YR2/2黒褐(釉)	口縁5/8	
95	SD113 上層	土師器	甕	(21.4)	残8.3			10YR7/4にぶい黄橙	頸部1/4	外面ハケメ。口縁端部に凹縁1条

表1 出土遺物観察表

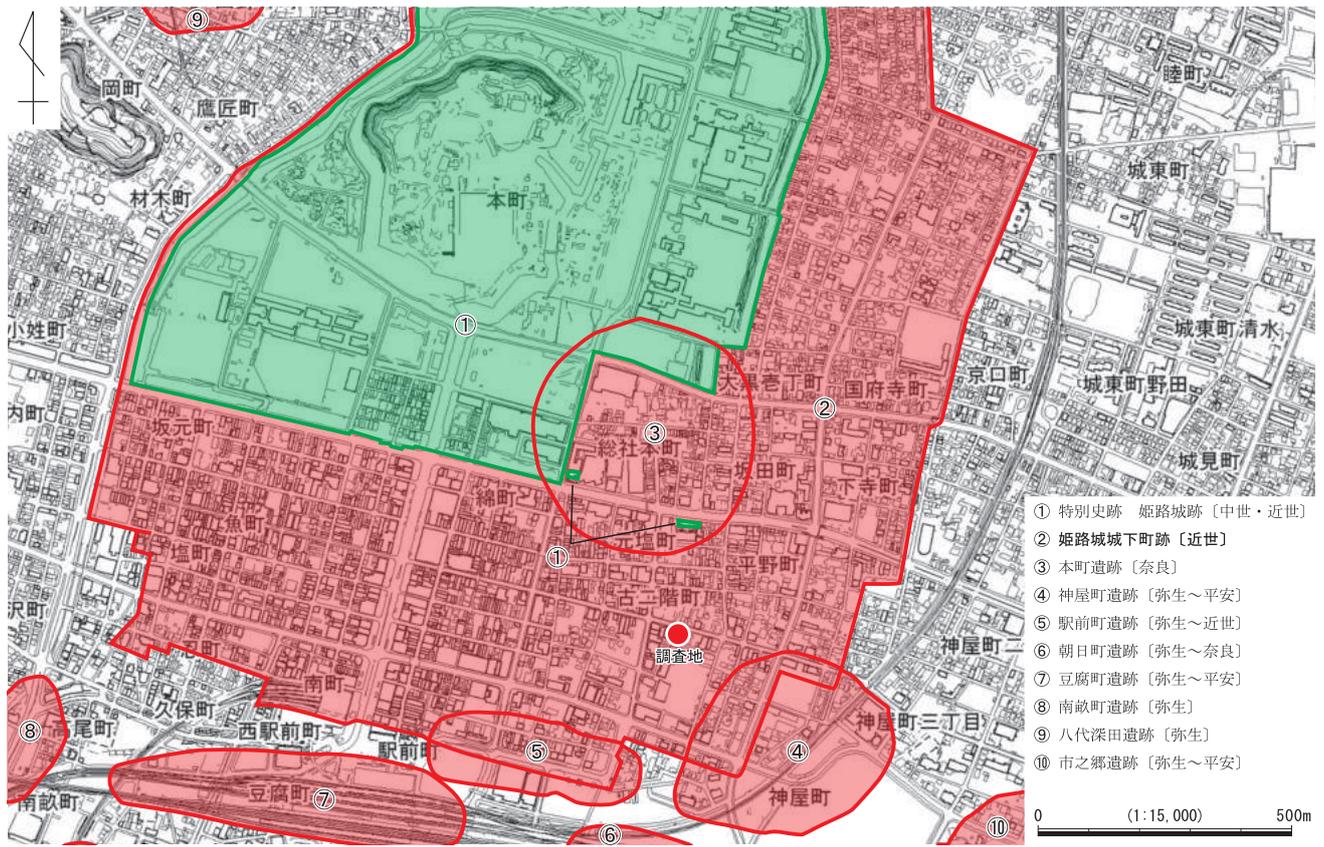


図2 周辺の遺跡

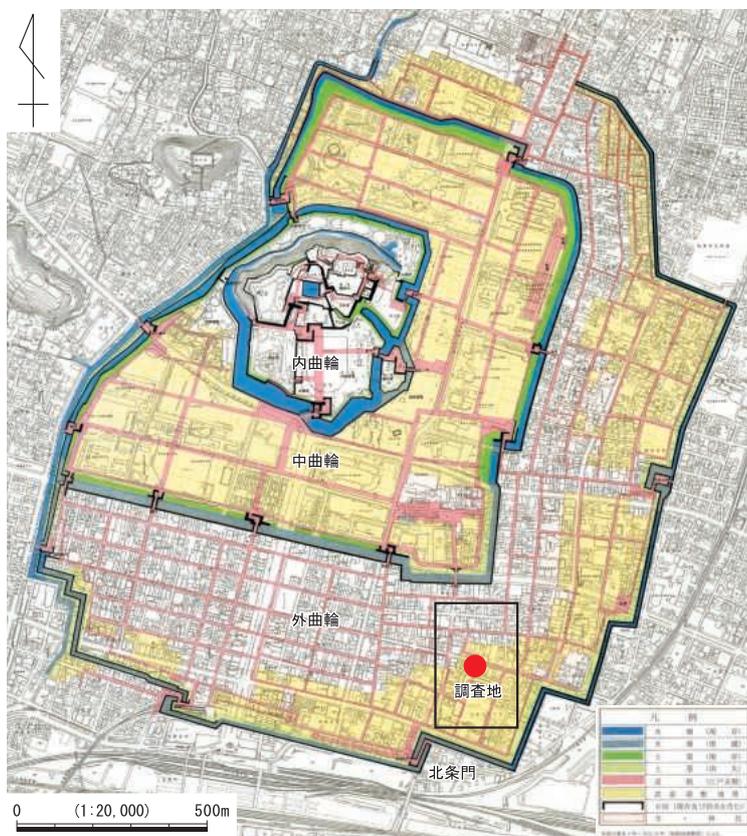


図3 調査位置図

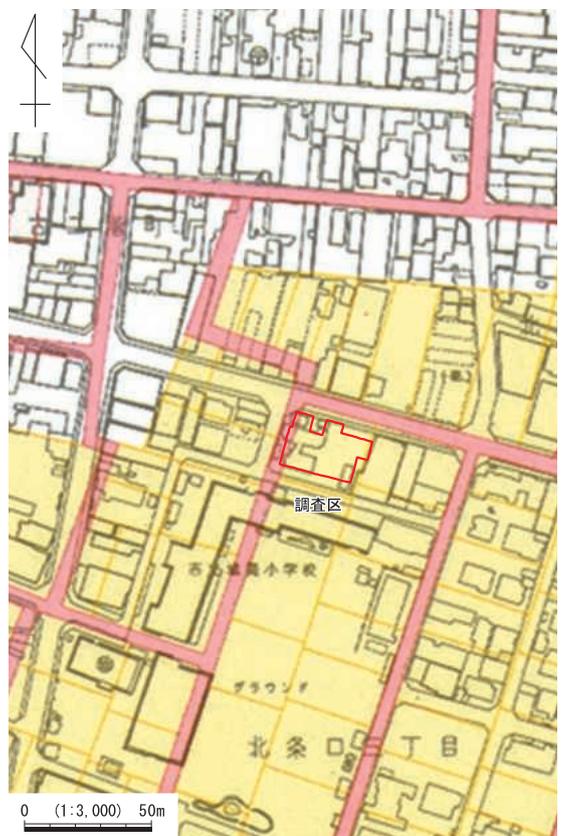


図4 調査区配置図

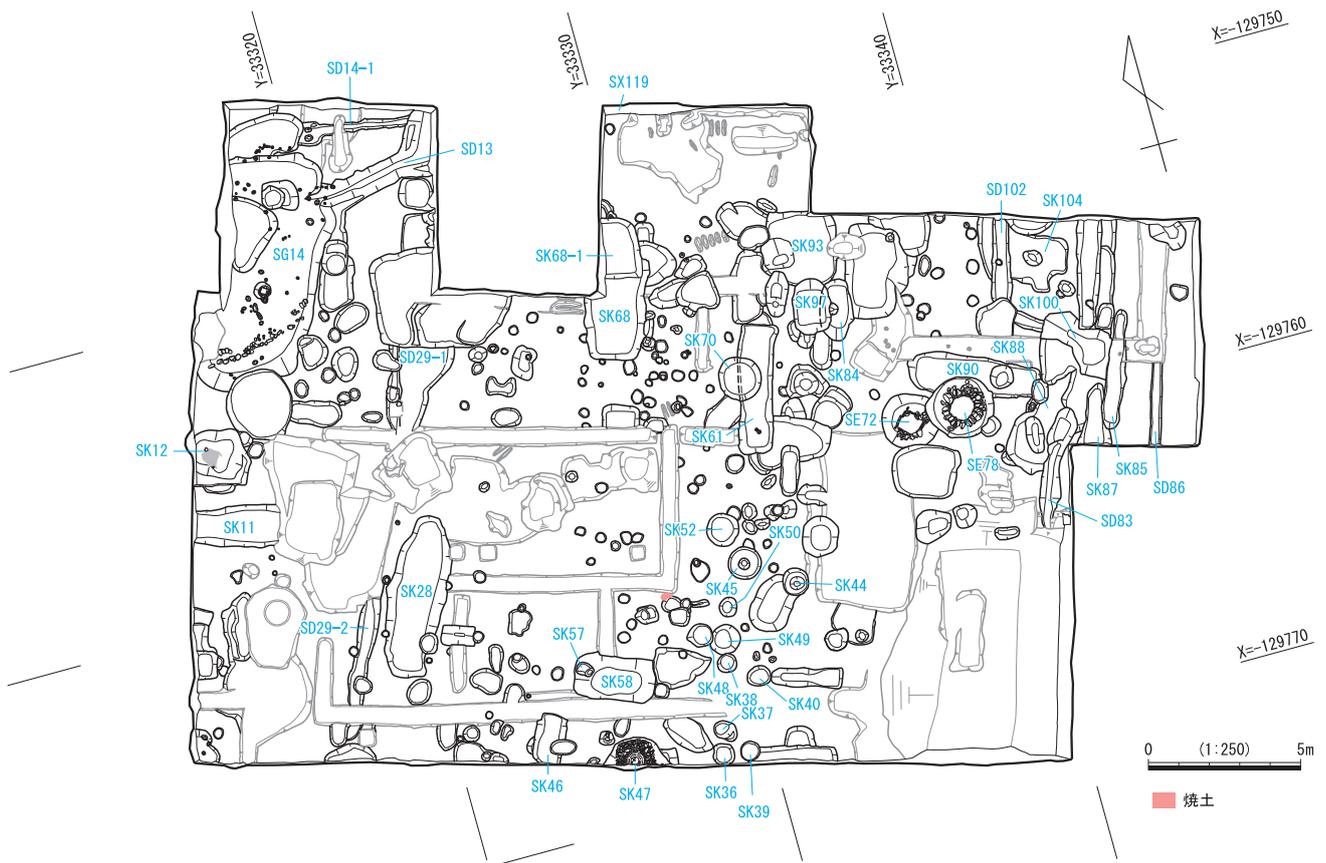
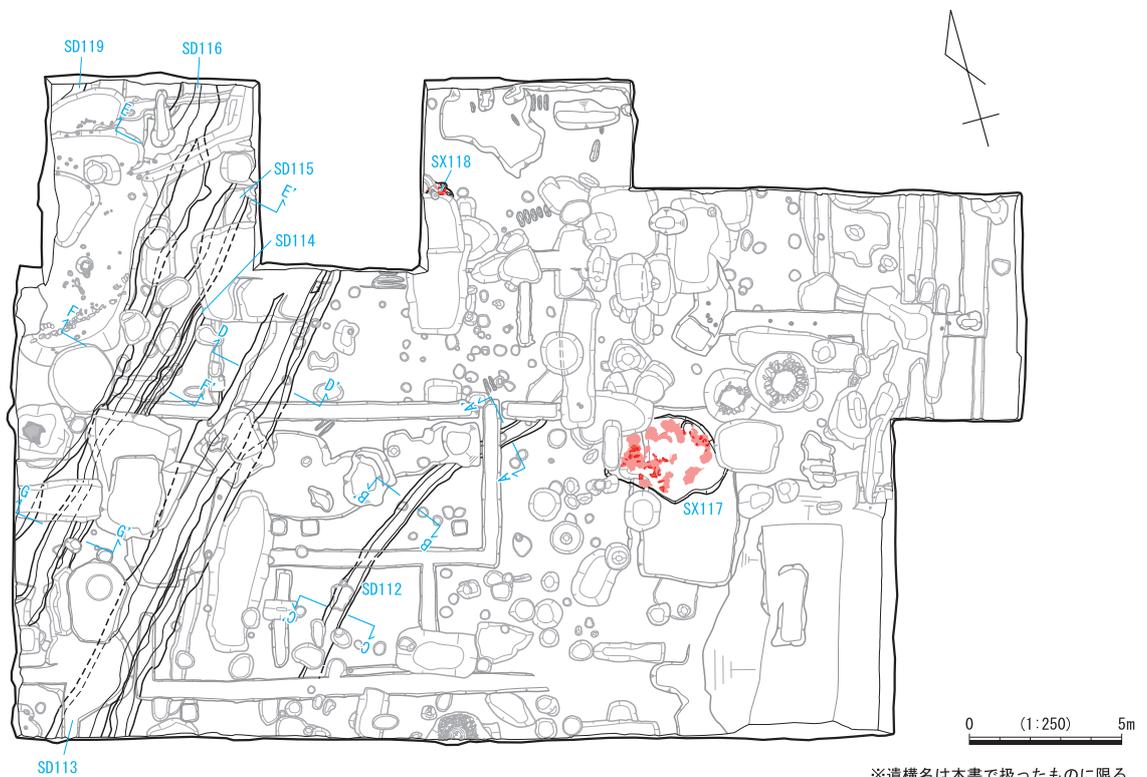
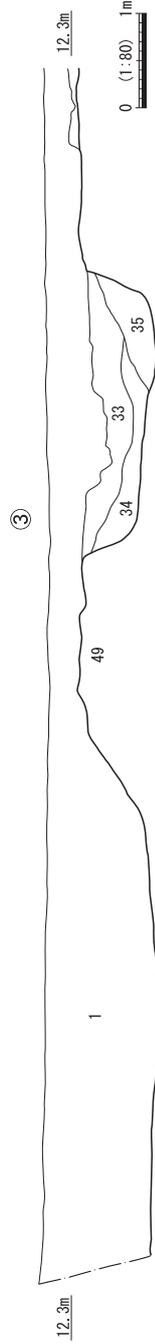
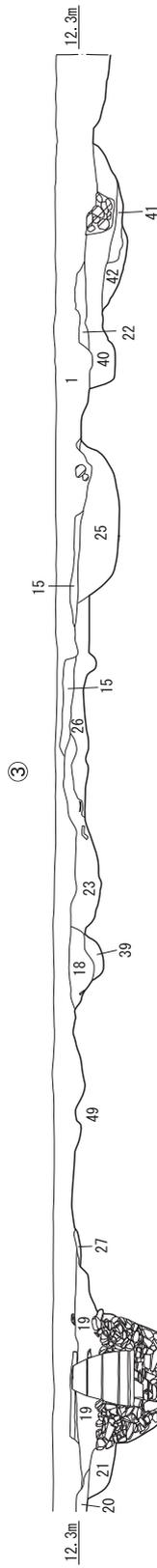
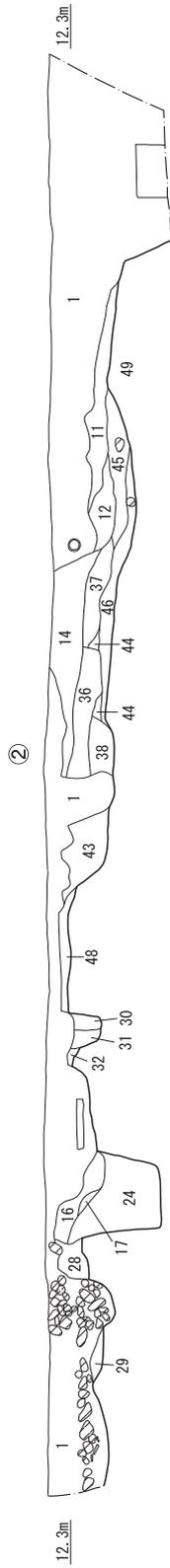
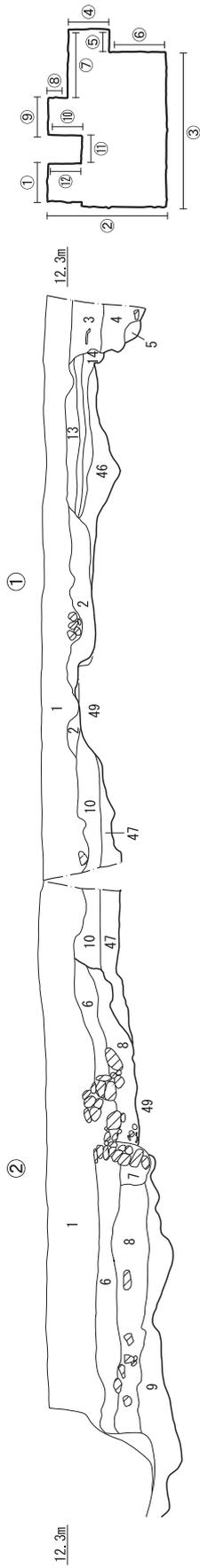


図5 調査区全体図（中・近世及び近代）



※遺構名は本書で扱ったものに限る。

図6 調査区全体図（古代以前）



1. 現代盛土・攪乱
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 褐灰色土ブロック含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂 やや均質。(SD13)
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 拳大円礫含む。(SD13)
5. 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土 灰黄褐色土含む。(SD13)
6. 10YR4/2 褐灰色極細砂 炭含む。(SG14 上層)
7. N3/0 暗灰色粘質土 (石組清理土)
8. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (SG14 下層)
9. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト質粘土 還元層 (SG14 下層)
10. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質細砂
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂 暗褐色土・地山ブロック含む。
12. 10YR4/1 褐灰色シルト質粘土 粗砂・炭含む。
13. 7.5YR4/1 褐灰色シルト質粘土 地山ブロック・炭・粗砂含む。(整地层カ)
14. 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂 炭・焼土含む。(整地层カ)
15. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 粗砂含む。(整地层カ)
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質細砂 焼土含む。
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質細砂 炭・貝含む。
18. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 地山ブロック少ない。ペロ藍の磁器片含む。
19. 10YR4/4 褐色極細砂 漆痕・拳大円礫含む。(SK47)
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂
21. 2.5Y4/1 黄灰色極細砂 粗砂含む。
22. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 粗砂含む。
23. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 地山ブロック、棉軸の土師器片含む。
24. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂～中砂
25. 10YR5/2 暗灰褐色極細砂 炭含む。
26. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土 灰黄褐色土含む。
27. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂 炭多く含む。
28. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂 瓦含む。
29. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土 灰黄褐色土含む。
30. 10YR5/2 暗灰褐色極細砂 炭・地山ブロックを含む。
31. 10YR5/2 暗灰褐色極細砂 灰黄褐色土混じる。
32. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 焼土・炭含む。
33. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 地山ブロック含む。
34. 10YR5/2 暗灰黄色極細砂 径 3 cm 大円礫含む。
35. 10YR5/1 褐灰色極細砂 径 3 cm 大円礫含む。
36. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂 均質。
37. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 乳児頭大円礫・焼土含む。(SK12)
38. 7.5YR4/2 灰黄褐色極細砂 地山ブロック含む。(SK11)
39. 10YR6/1 褐灰色極細砂 地山ブロック含む。
40. 10YR6/2 灰黄褐色シルト質細砂 炭・拳大角礫含む。(SD113)
41. 10YR6/2 暗灰褐色シルト質細砂～粗砂 水成堆積。(SD113)
42. 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂～粗砂 (SD113)
43. 10YR6/2 暗灰褐色シルト質細砂 (SD115)
44. 10YR6/2 暗灰褐色シルト質細砂 乳児頭大円礫含む。(SD116)
45. 10YR6/2 暗灰褐色中砂～粗砂 (SD116)
46. 10YR6/2 暗灰褐色シルト質細砂 (SD116)
47. 10YR6/2 暗灰褐色シルト質細砂 乳児頭大円礫含む。(SD119)
48. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質粘土 地山が土壌化。
49. 10YR7/8 黄褐色シルト質粘土 (地山)

図7 調査区北壁一西壁一南壁断面図



SX119 (南東から)

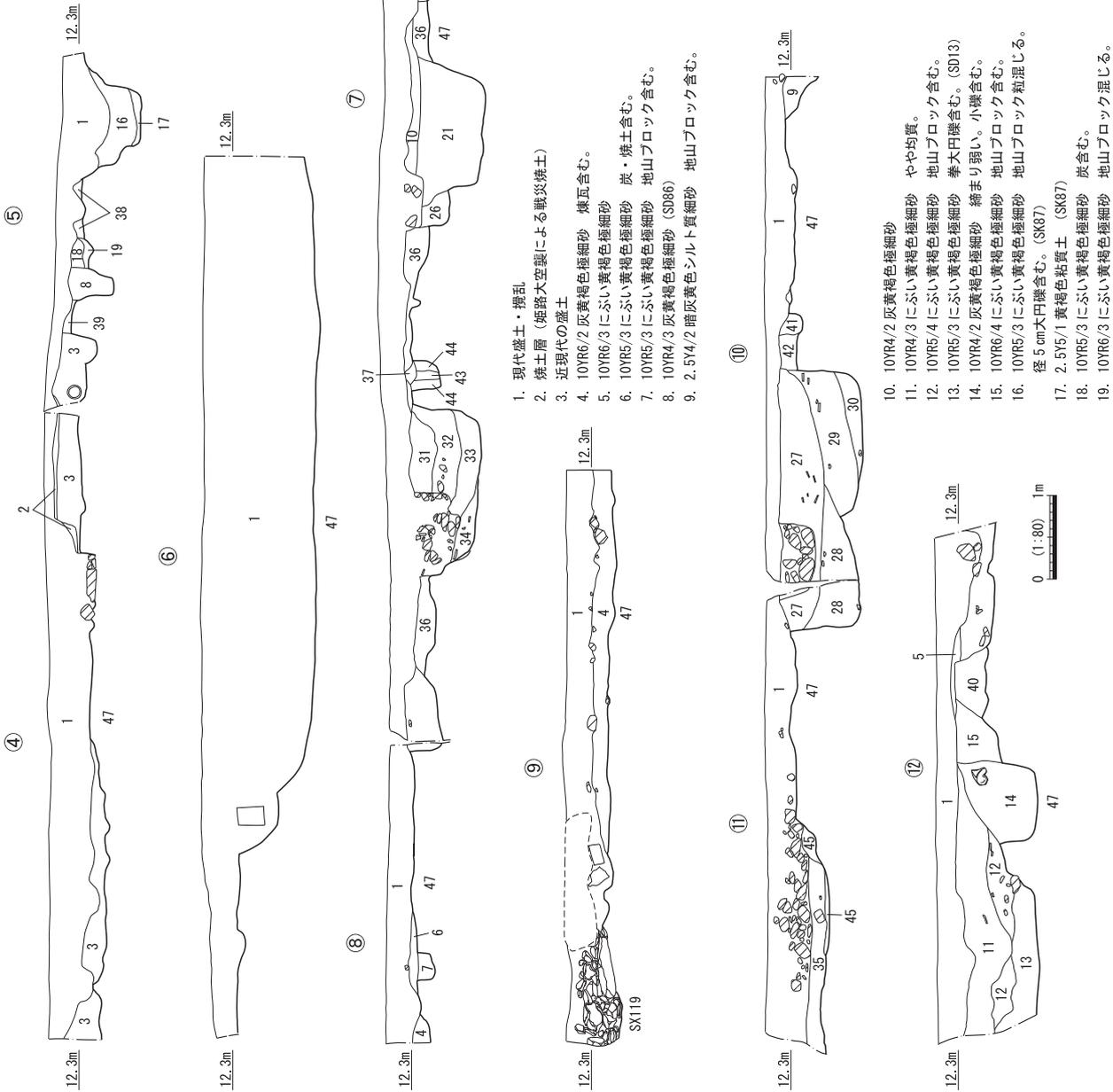


図8 調査区東壁一北壁断面図

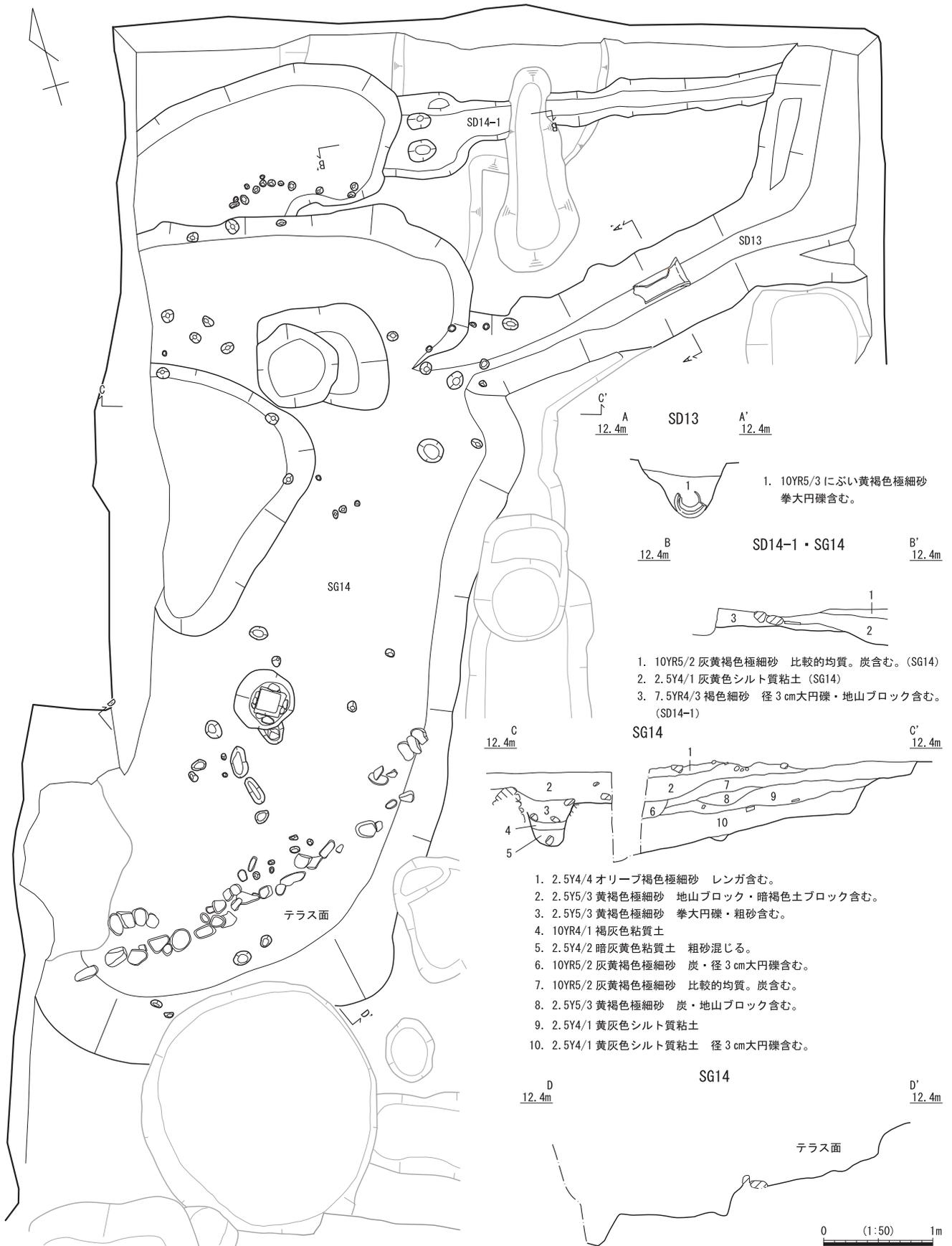
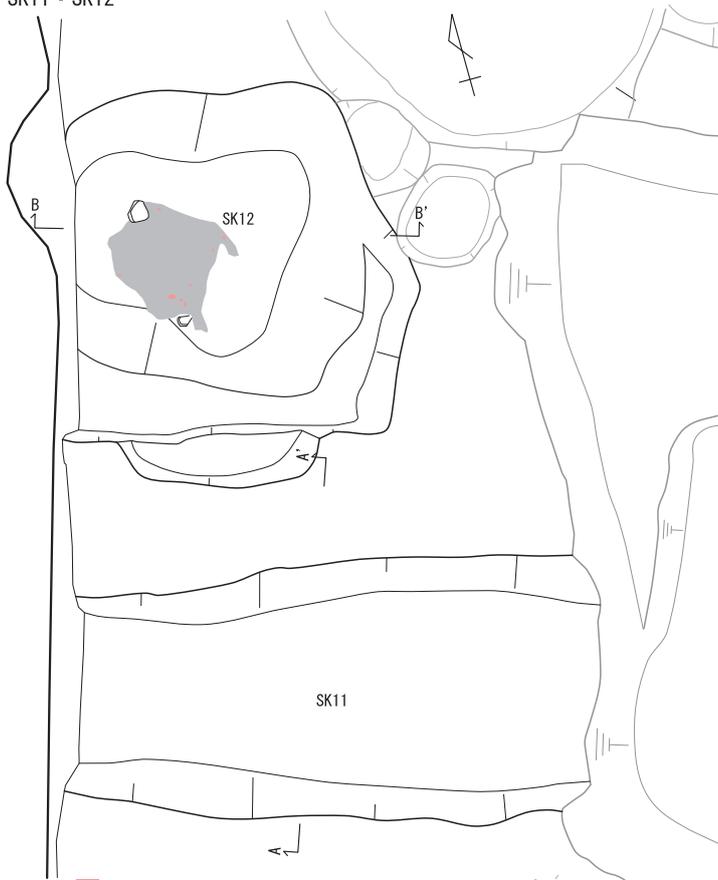
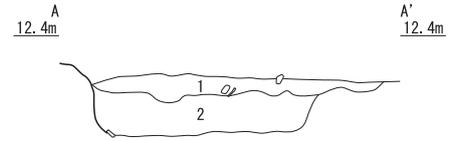


図9 SG14・SD13・SD14-1 平・断面図

SK11・SK12

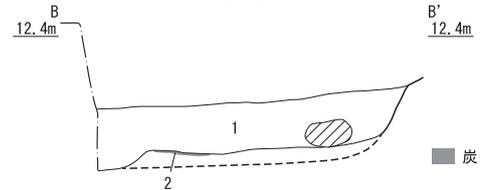


SK11



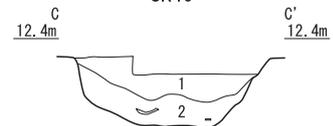
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 径3cm大円礫・炭含む。
2. 7.5YR4/2 灰褐色極細砂 地山ブロック含む。瓦出土。

SK12



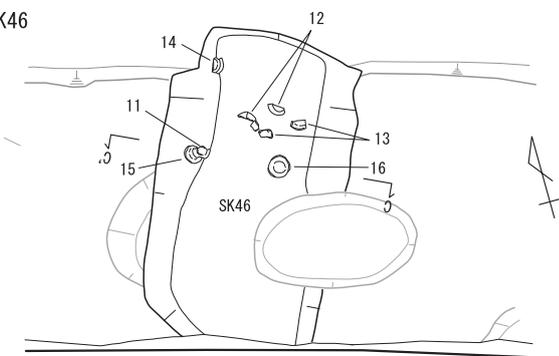
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 乳児頭大円礫・焼土含む。
2. 炭層

SK46



1. 10YR7/3 にぶい黄褐色粘質土 地山ブロック多く含む。
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 炭含む。土師器皿出土。

SK46

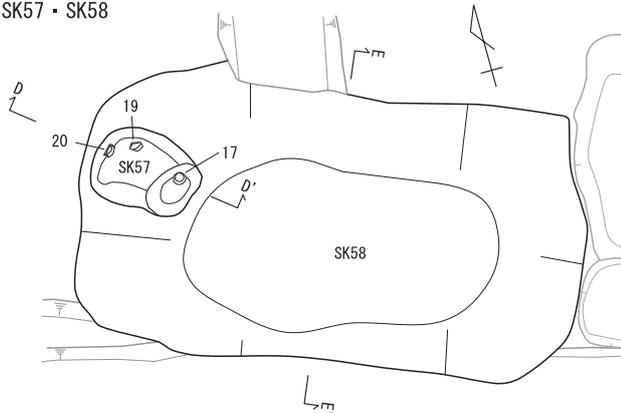


SK57

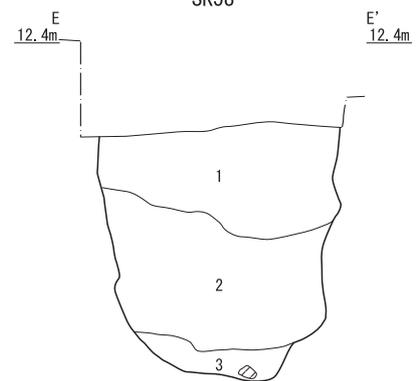


1. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂

SK57・SK58



SK58

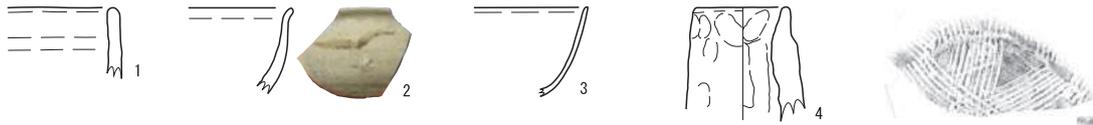


1. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質粘土
2. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト質粘土 にぶい黄褐色土ブロック含む。
3. 5B5/1 青灰色シルト質粘土 締まり弱い。

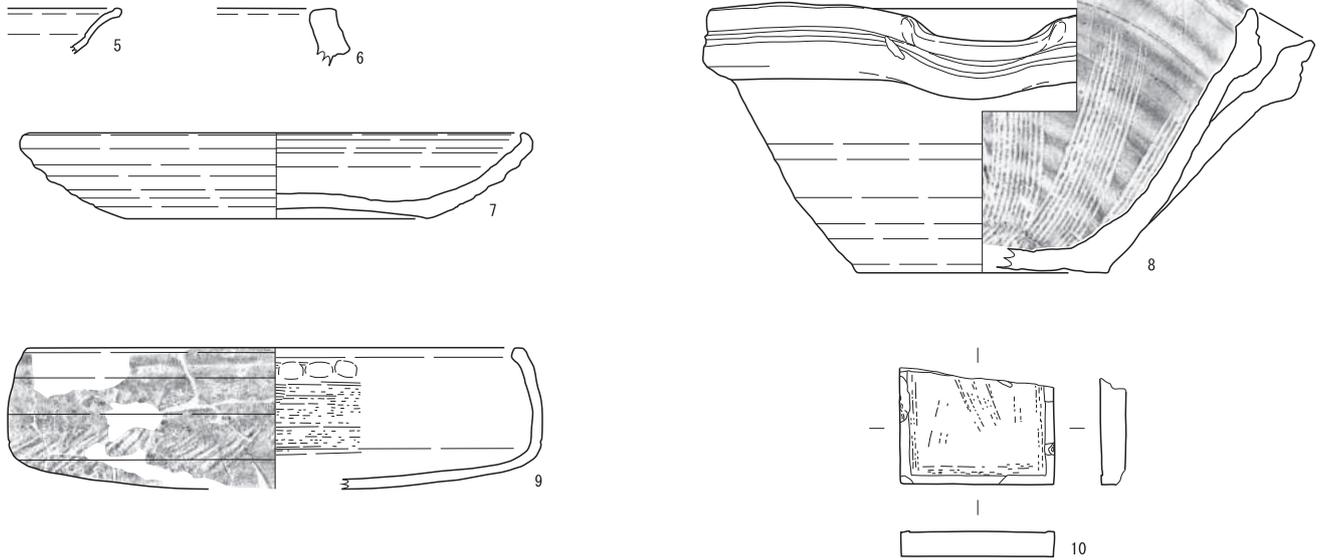


図10 SK11・SK12・SK46・SK57・SK58 平・断面図

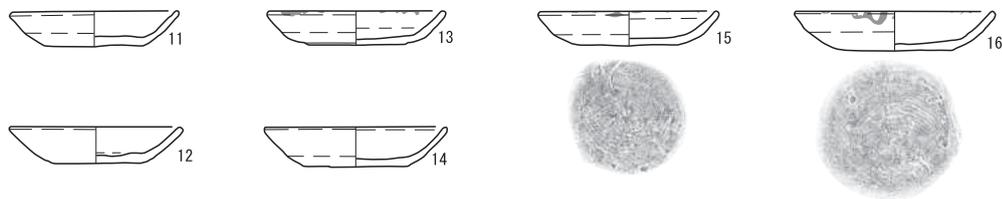
SK11



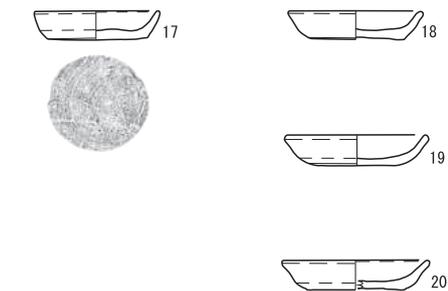
SK12



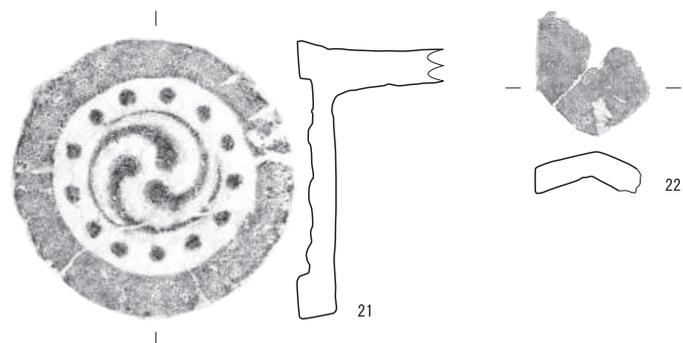
SK46



SK57



SK58



0 (1:4) 10cm

图11 SK11 · SK12 · SK46 · SK57 · SK58 出土遺物

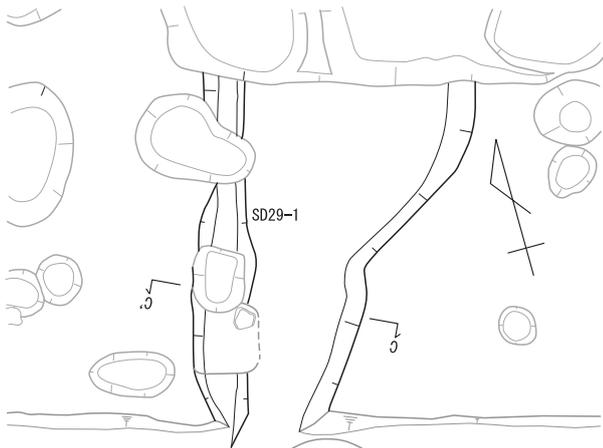


図12 SK28・SD29 平面図

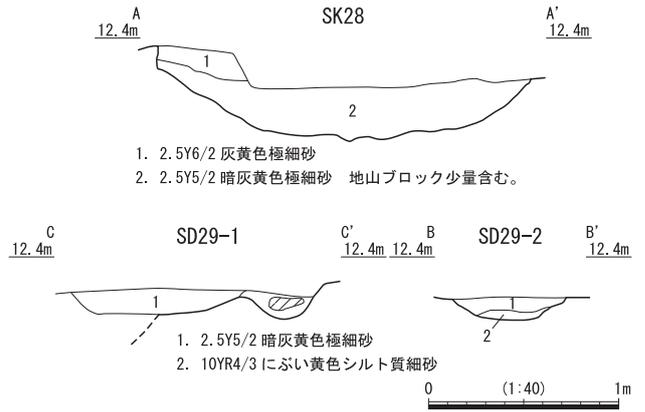
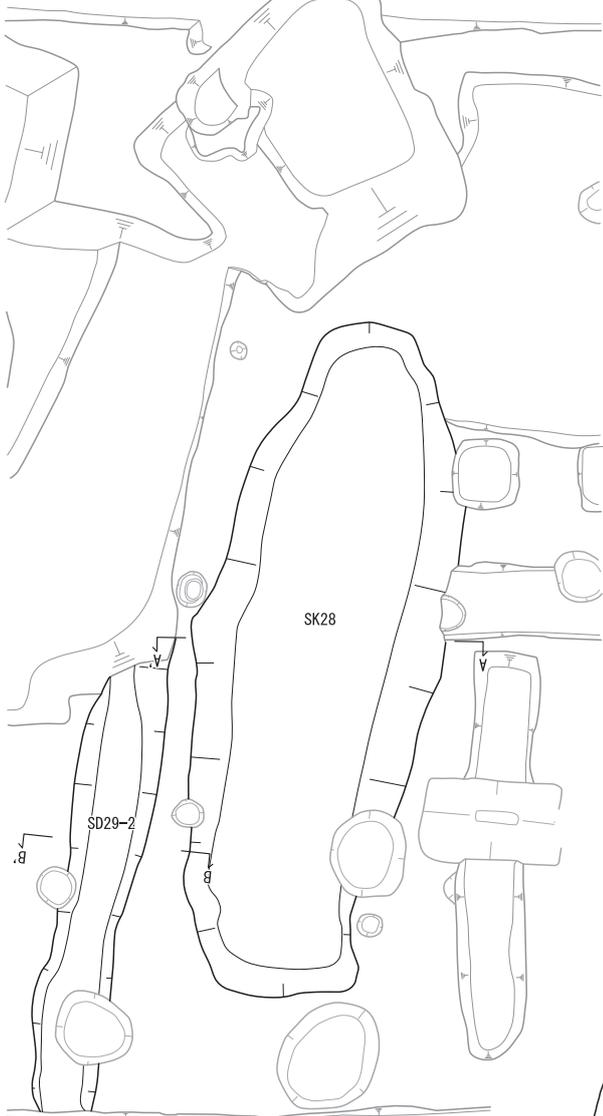


図13 SK28・SD29断面図

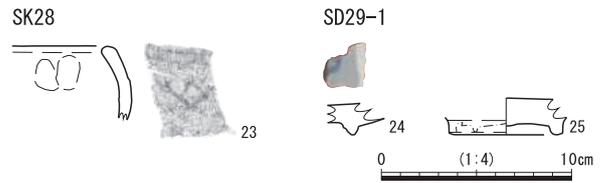


図14 SK28・SD29-1 出土遺物

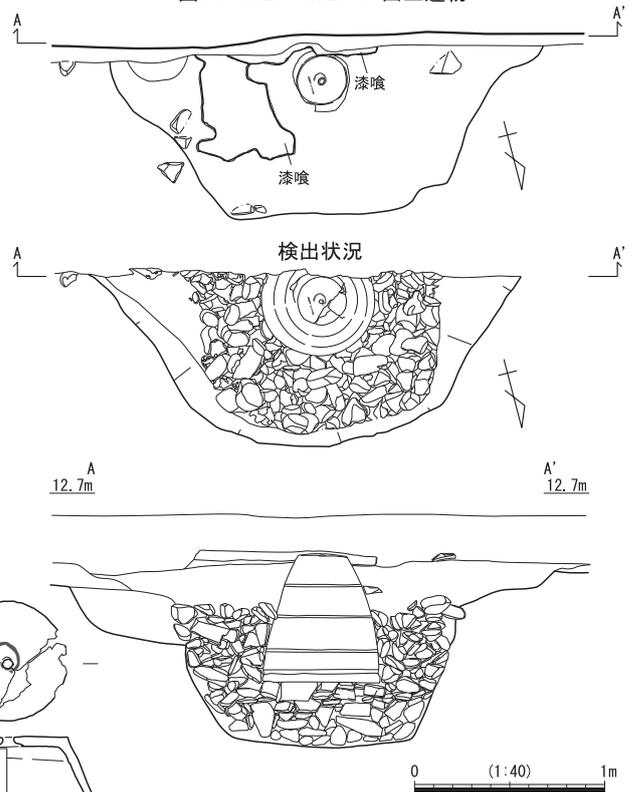


図15 SK47 平・立面図

図16 SK47 出土遺物

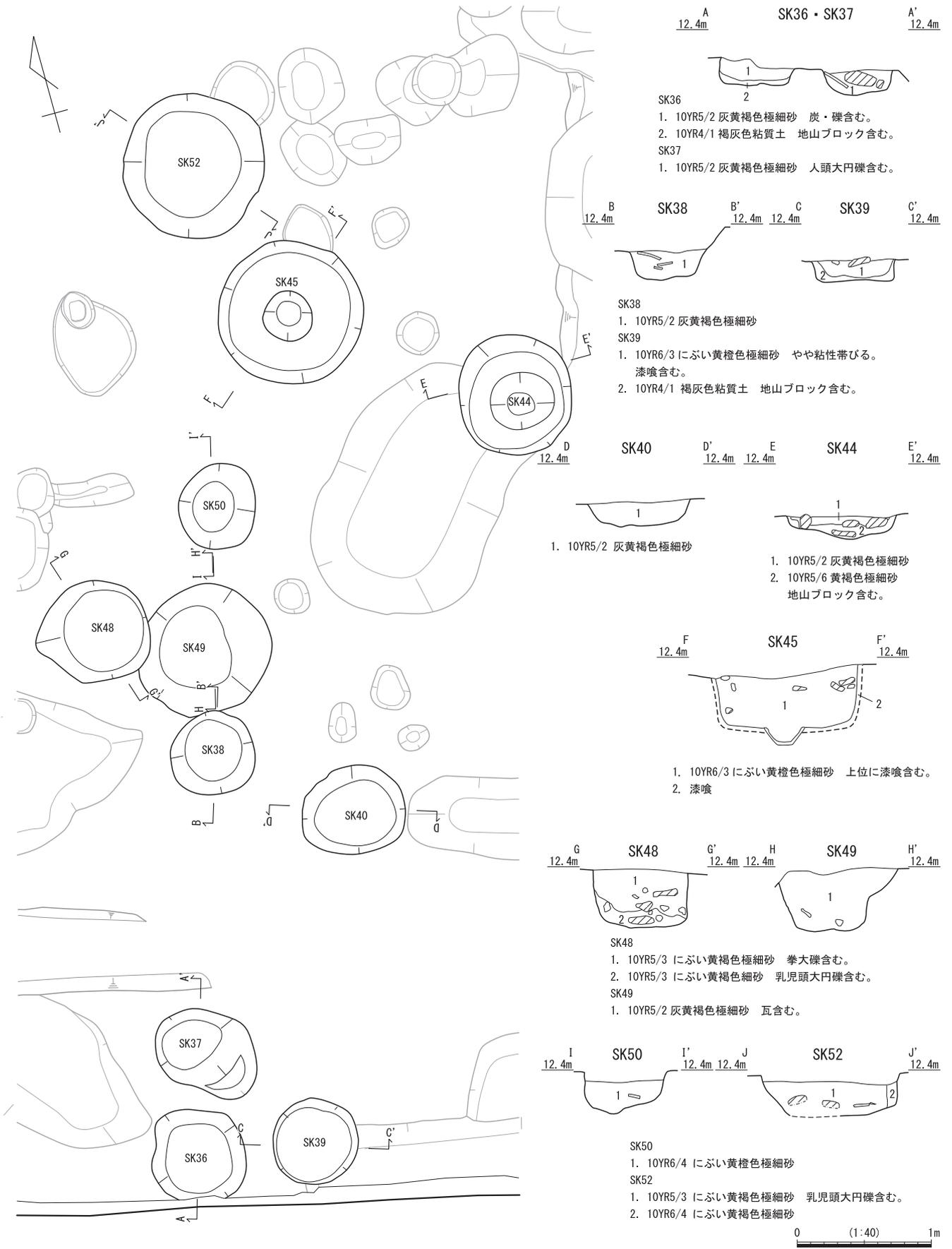
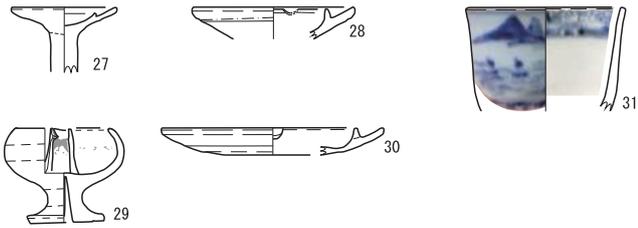
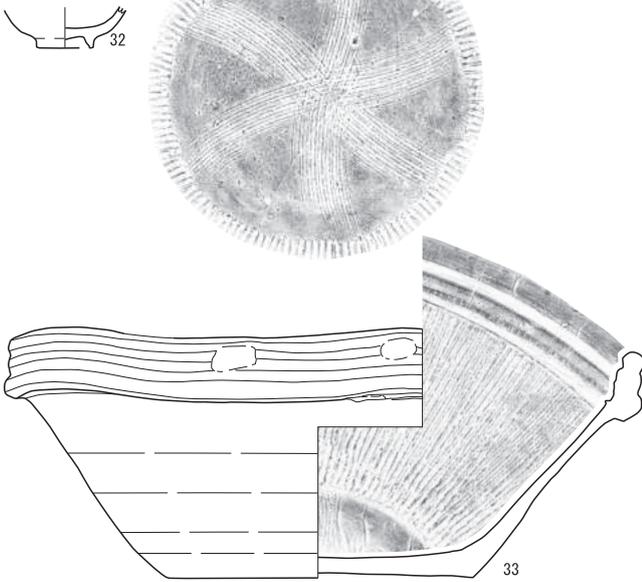


図17 SK36・SK37・SK38・SK39・SK40・SK44・SK45・SK48・SK49・SK50・SK52 平・断面図

SK40



SK45



SK52

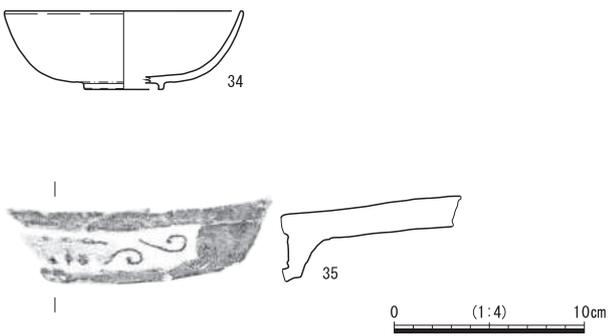


図18 SK40・SK45・SK52 出土遺物

SK61・SK70

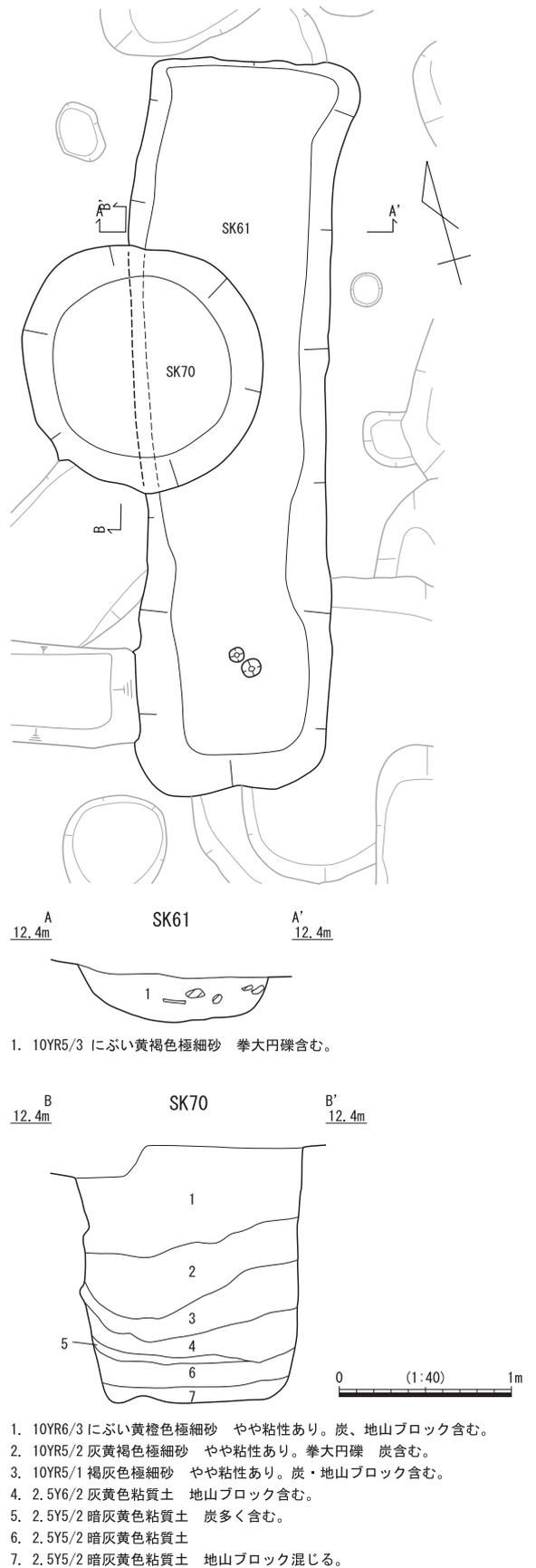
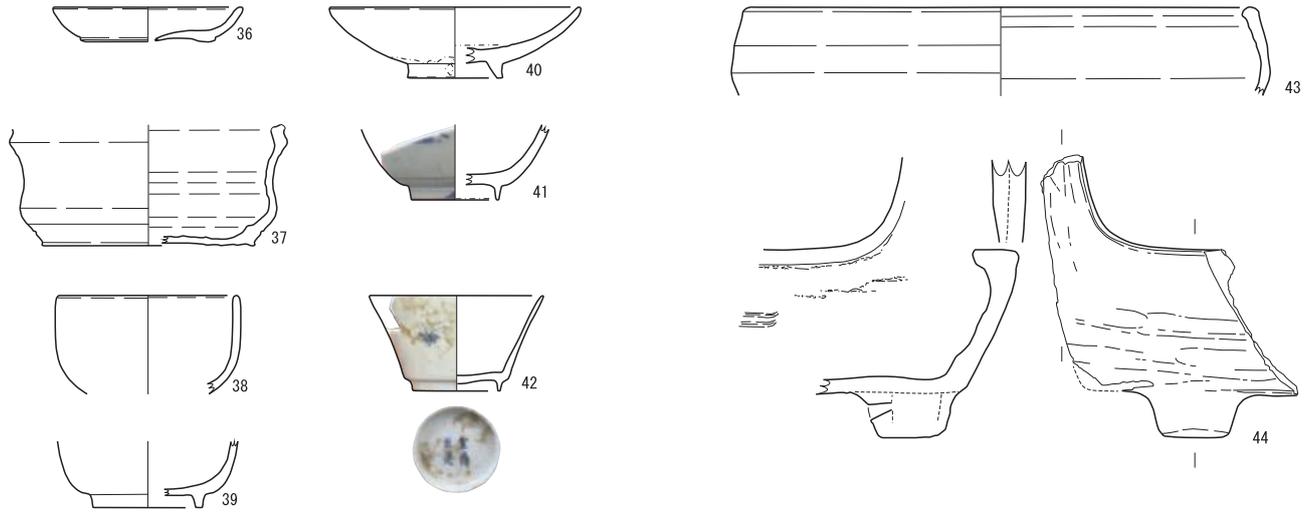
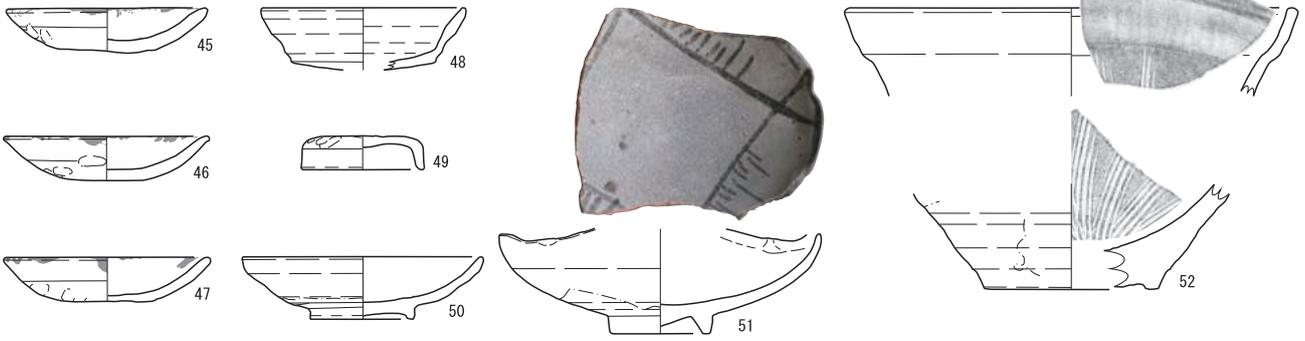


図19 SK61・SK70 平・断面図

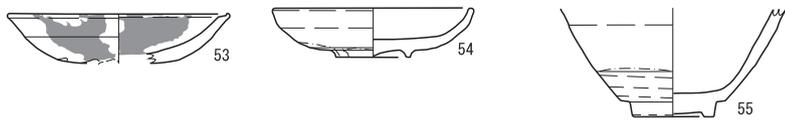
SK61



SK70 中層



SK70 下層



SK70

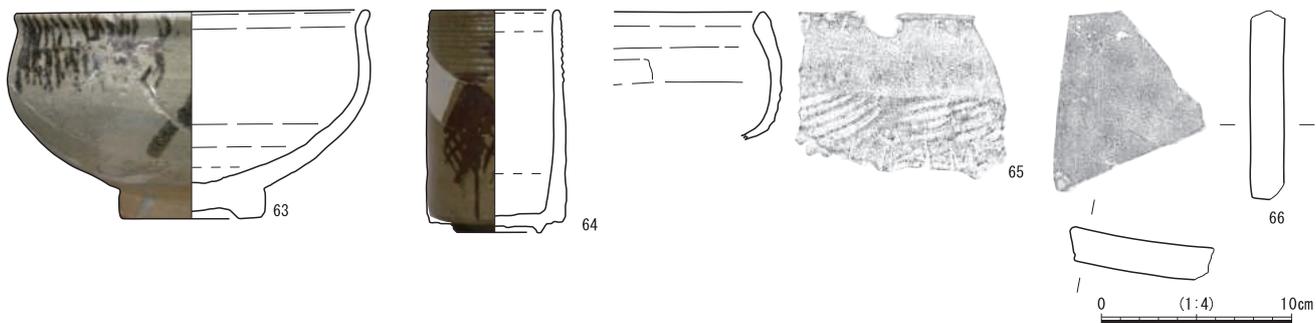
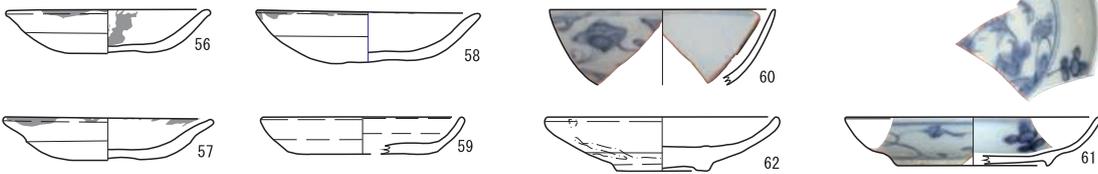


图20 SK61·SK70 出土遺物

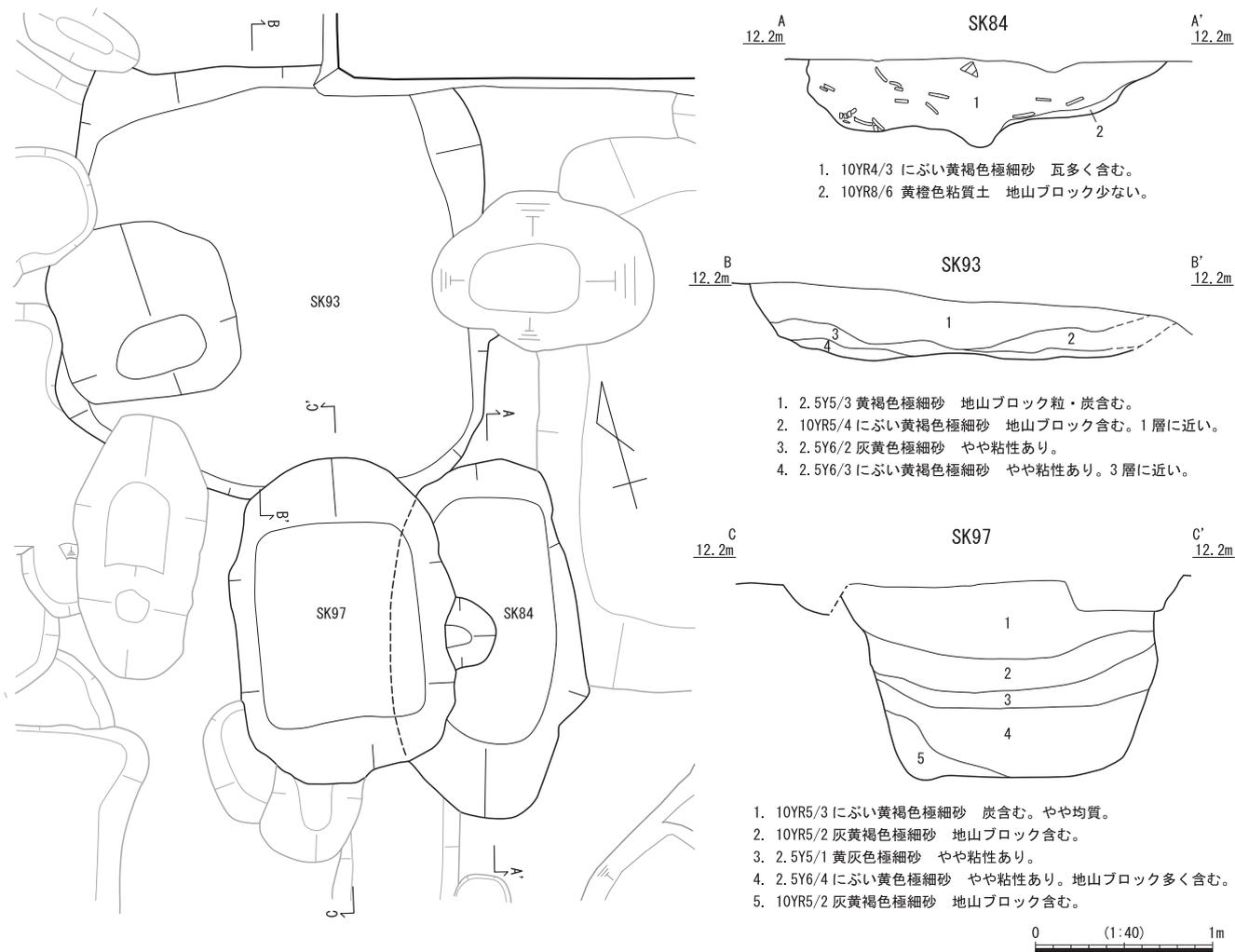


図21 SK84・SK93・SK97 平・断面図

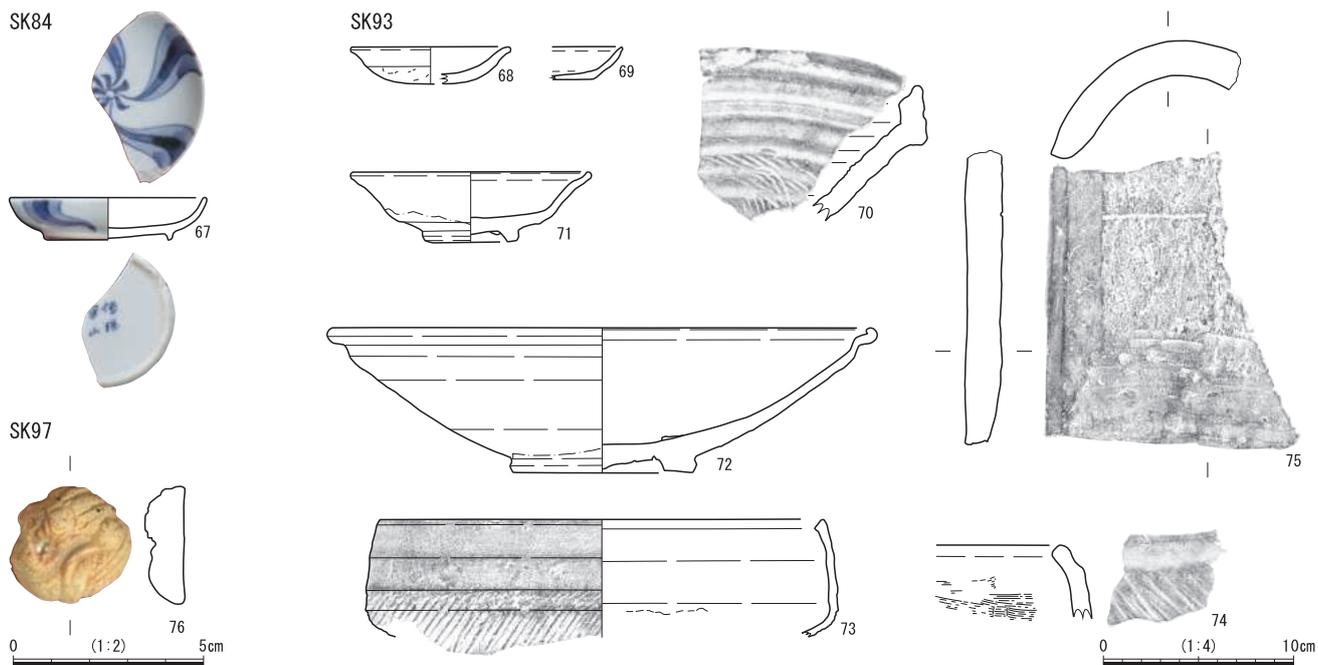


図22 SK84・SK93・SK97 出土遺物

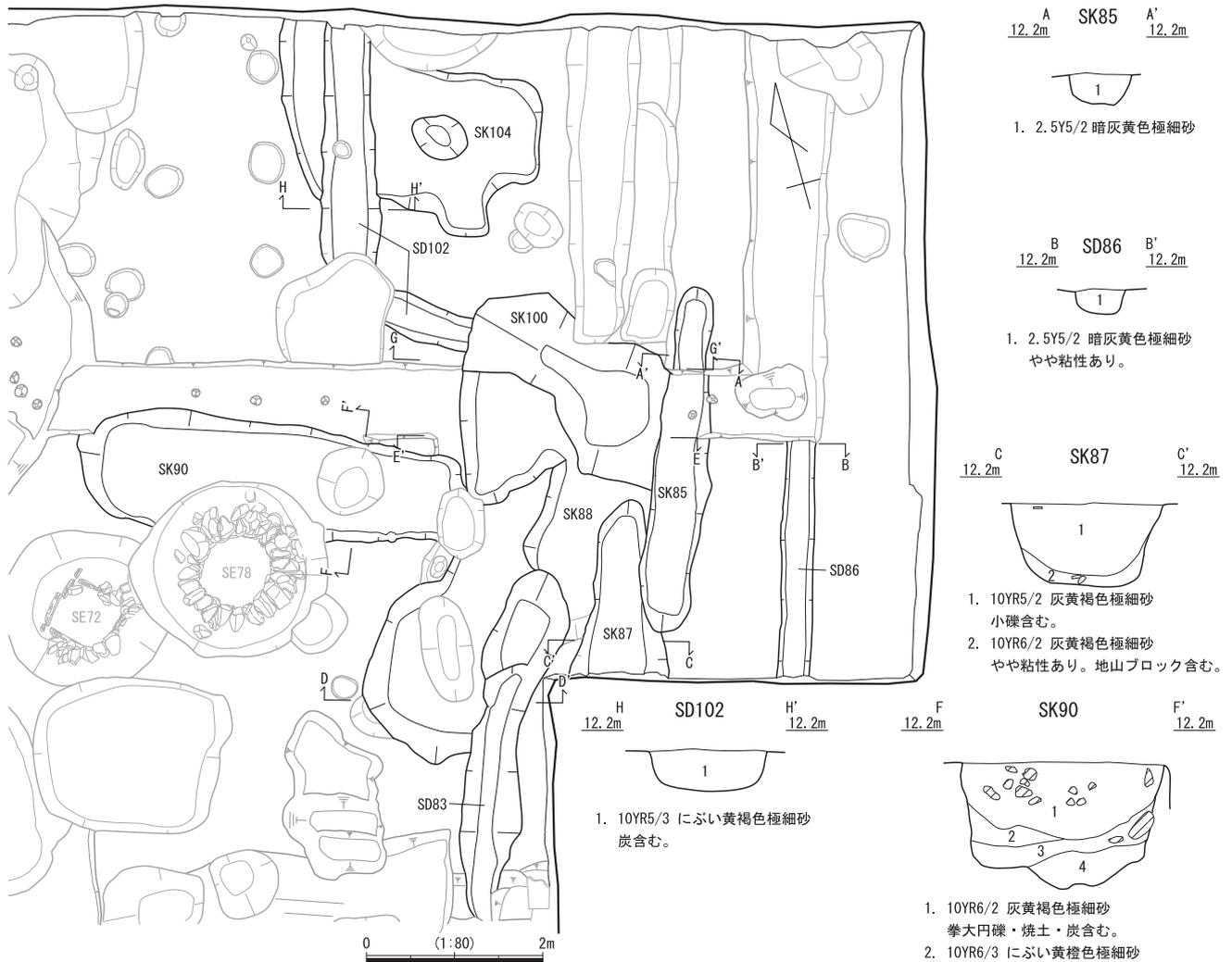


図23 SD83・SK85・SD86・SK87・SK88・SK90・SK100・SD102・SK104 平面図

A SK85 A' 12.2m 12.2m



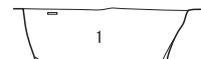
1. 2. 5Y5/2 暗灰黄色極細砂

B SD86 B' 12.2m 12.2m



1. 2. 5Y5/2 暗灰黄色極細砂 やや粘性あり。

C SK87 C' 12.2m 12.2m



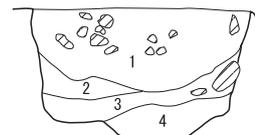
1. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂 小礫含む。
2. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂 やや粘性あり。地山ブロック含む。

H SD102 H' 12.2m 12.2m F 12.2m



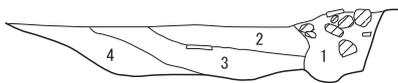
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 炭含む。

SK90 F' 12.2m



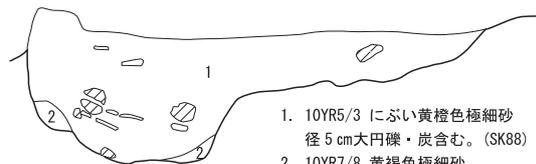
1. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂 拳大円礫・焼土・炭含む。
2. 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂 炭・焼土含む。
3. 10YR7/1 灰白色極細砂 乳児頭大円礫含む。
4. 10YR7/1 灰白色極細砂 上層界に炭含む。

D SK88 SD83 D' 12.2m 12.2m



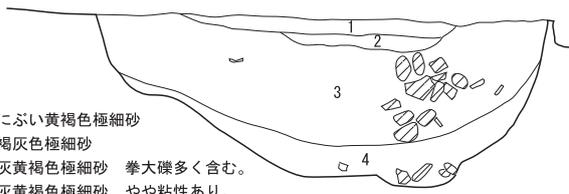
1. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂 上位~中位に拳大円礫多く含む。(SD83)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 炭少ない。(SK88)
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 炭多く含む。(SK88)
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 地山ブロック多く含む。(SK88)

E SK88 E' 12.2m



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 径5cm大円礫・炭含む。(SK88)
2. 10YR7/8 黄褐色極細砂

G SK100 G' 12.2m



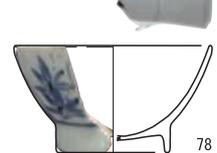
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂
2. 10YR4/1 褐灰色極細砂
3. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂 拳大礫多く含む。
4. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂 やや粘性あり。

0 (1:40) 1m

SK87



SK90



SD102



0 (1:4) 10cm

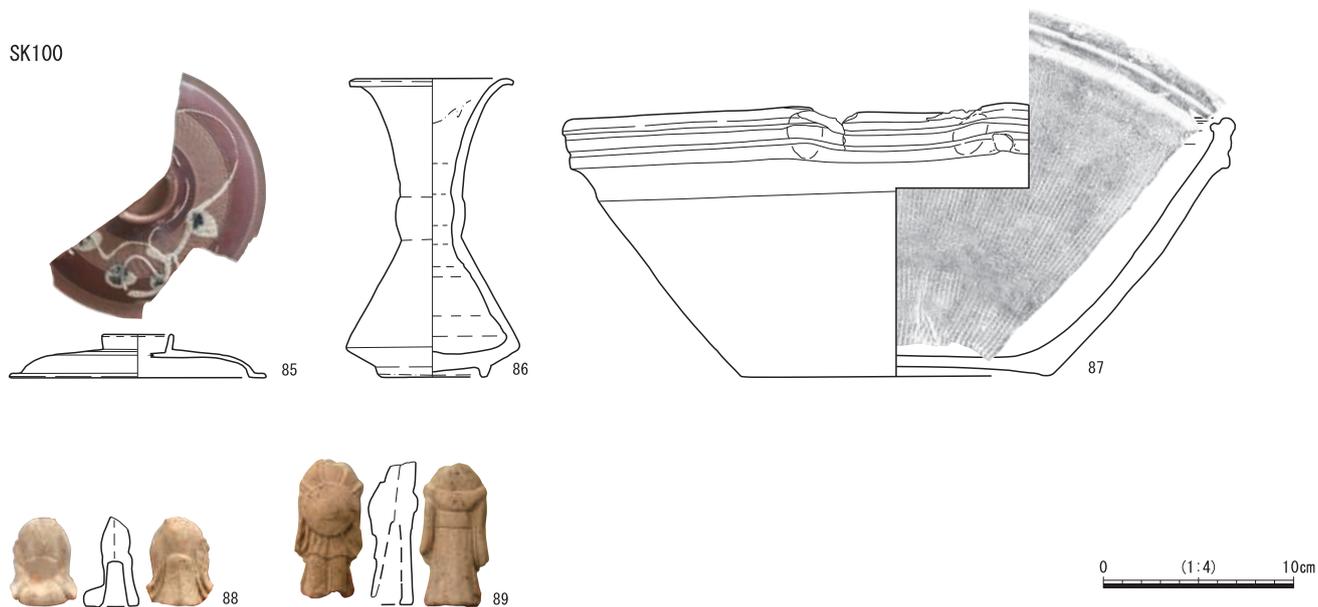
図24 SD83・SK85・SD86・SK87・SK88・SK90・SK100・SD102 断面図

図25 SK87・SK90・SD102 出土遺物

SK88



SK100

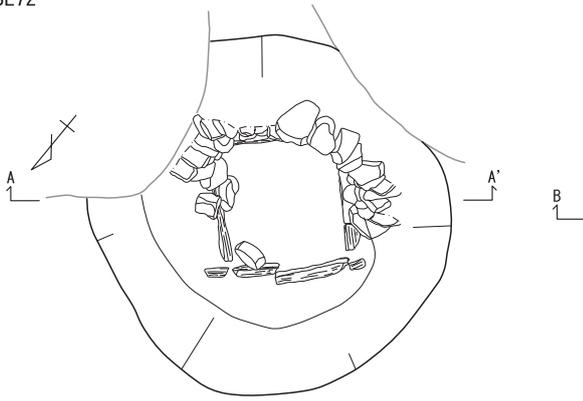


SK68

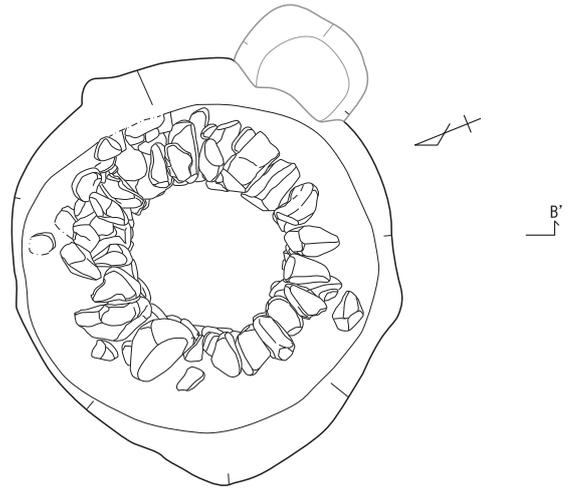


图26 SK68 · SK88 · SK100 出土遺物

SE72



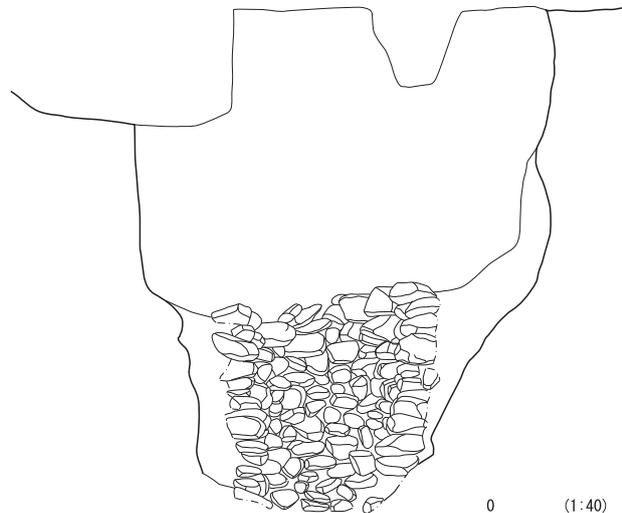
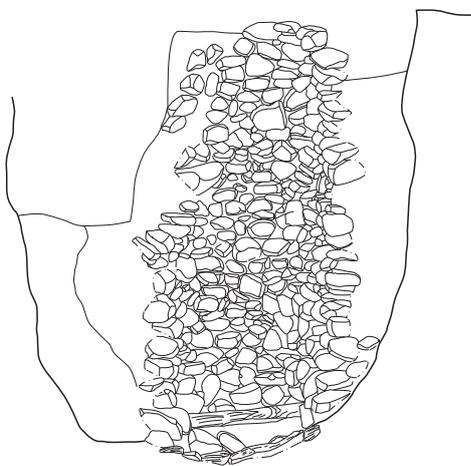
SE78



A
12.0m

A' 12.0m B
12.0m

B' 12.0m

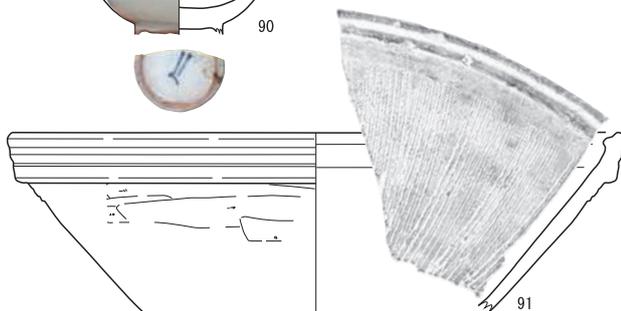
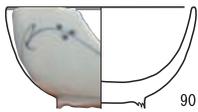


0 (1:40) 1m

0 (1:40) 1m

图27 SE72·SE78 平·断面图

SK104



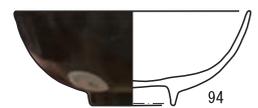
0 (1:4) 10cm

图28 SK104 出土遺物

SE72



SE78



0 (1:4) 10cm

图29 SE72·SE78 出土遺物

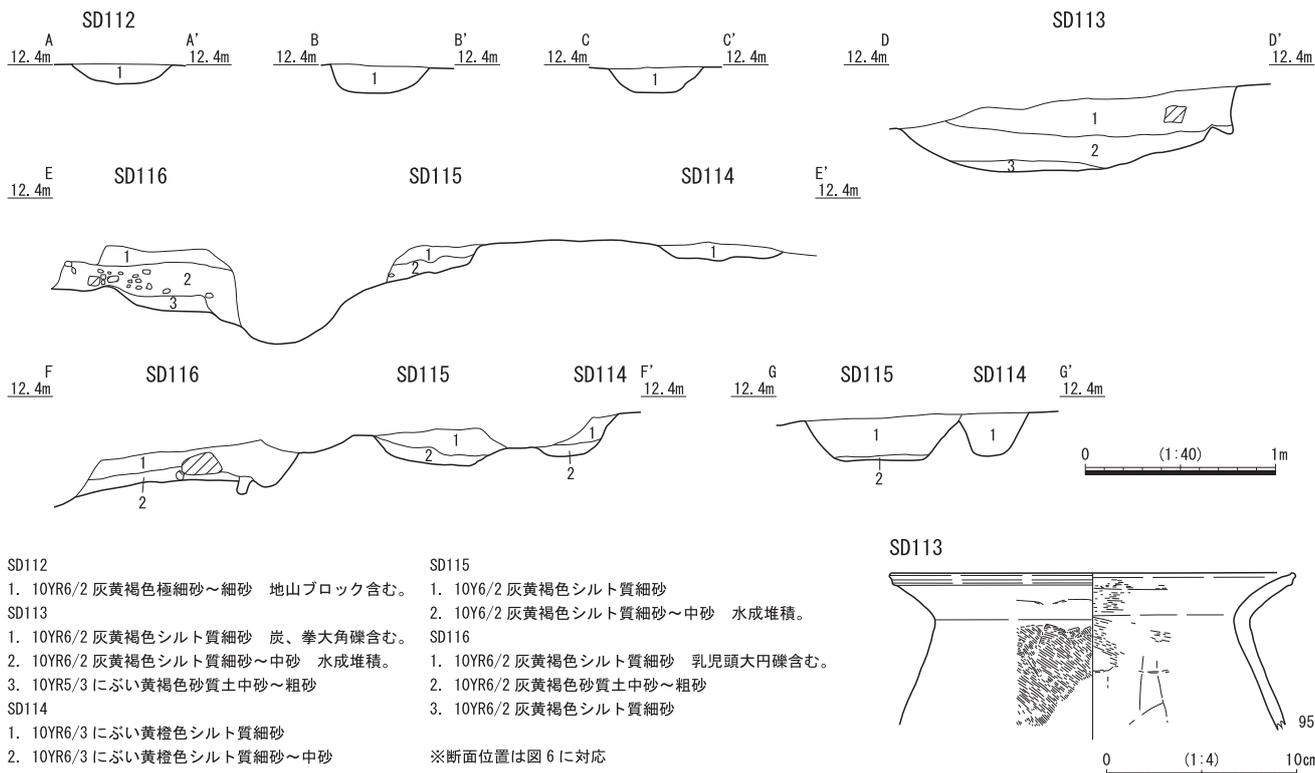


図30 SD112・SD113・SD114・SD115・SD116 断面図

図31 SD113 出土遺物

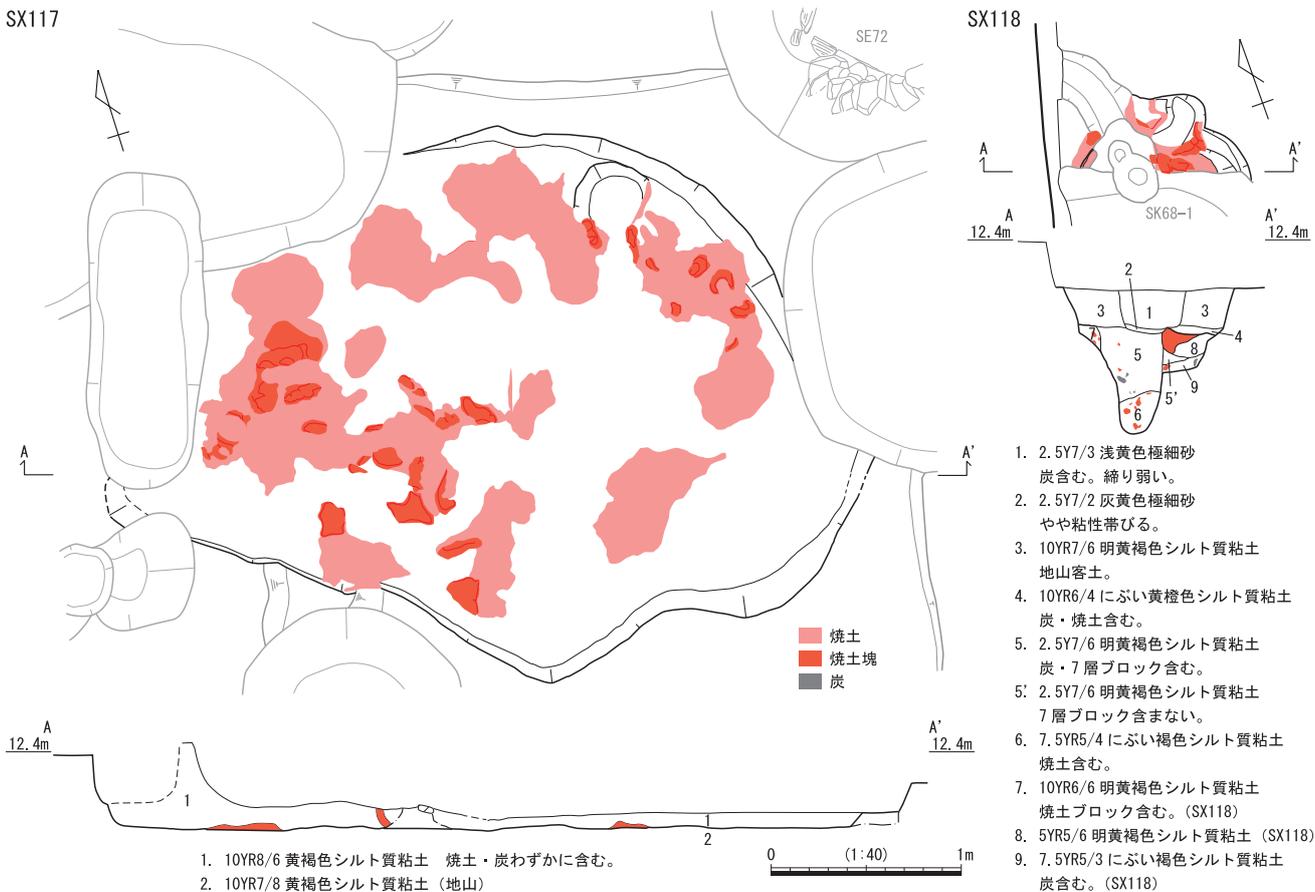


図32 SX117・SX118 平・断面図



調査区全景（北から）



調査区全景（南西から）

遺構写真（1）



SG14と石組溝（南東から）



SG14遺物出土状況（南東から）



SD13土管（北東から）



SG14（南東から）



中央部全景 (南東から)



SK11断面 (東から)



SK12断面 (南から)



SK28断面 (北から)



SD29-1断面 (北から)



SK28・SD29 (南から)



SK46遺物出土状況 (北から)



SK57遺物出土状況 (西から)



SK58断面 (西から)



SK61断面 (南から)



SK70断面 (東から)



SK70 (東から)



SK47 (北から)



SK47検出状況 (北から)



SK47断面 (北から)



SK47遺物 (26) 除去後 (北から)



SK47完掘 (北から)



北東部全景 (南から)



SK45断面 (南西から)



SK45 (南西から)



SK68・SK68-1 (南東から)



SK84断面 (西から)



SD83・SK88断面 (南から)



SK88・SK100断面 (北から)



SK88・SK100断面 (南から)



SK88・SK100 (南東から)



SK90断面 (東から)



SK93断面 (西から)



SK97断面 (南東から)



北東端部全景 (北から)



SK85 (北から)



SD86断面 (北から)



SE72 (北西から)



SE78 (南から)



SK87断面 (北から)



SE72断面 (北西から)



SE78断面 (北西から)



SD102断面 (南から)



SE72基底部の木組 (北西から)



SD112 (北東から)



SD113断面 (南から)



SD113土器 (95) 出土状況 (北西から)



SD114・SD115・SD116断面E (南から)



SD114・SD115・SD116断面F (南から)



SD114・SD115断面G (南から)



SD113 (北から)



SX117 (南から)



SD114・SD115・SD116 (南から)



SX118周辺の炭化材検出状況 (南東から)



SX118 (南東から)

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第436次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	南 憲和							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和4年(2022年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 ほうじょうぐちさんちょうめ 北条口三丁目 46番・47番・48番	28201	020169	34° 49' 47"	134° 41' 51"	2020.4.1 ～ 2020.5.28	587㎡	住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
姫路城城下町跡	集落跡	中・近世、近代 古代以前	溝、土坑、井戸 溝	陶磁器・土師器・瓦 土師器		20190647		
要約	<p>調査地は姫路城の外曲輪南東部の下級武家屋敷地の一区画に該当する。調査の結果、17世紀初頭から幕末・近代にわたる土坑・溝等の遺構を検出した。17世紀前半以前の土地利用は不明であるが、絵図では17世紀中頃には武家屋敷地になっており、18世紀後半から19世紀初頭頃までは継続していたとみられる。遺構の分布から18世紀後半以降の武家屋敷地の空間構成を検討した結果、主屋の位置は南西部に想定され、主屋の北西に園池、裏側に水琴窟を設けた庭園を配置し、井戸は主屋から一定の距離を隔てた東側に存在したと考えられる。</p> <p>古代以前の溝と飾磨郡の条里地割の関係については、今後の課題としたい。</p>							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第116集

姫路城城下町跡

－姫路城跡第436次発掘調査報告書－

令和4年(2022年)3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2